
異世界トリップおじいちゃん

一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界トリップおじいちゃん

【Nコード】

N7410R

【作者名】

一文字

【あらすじ】

高校1年の少女、『私』こと床詠綾花は祖父であるヨシツグと夏休みを利用し、京都旅行に来ていた、はずだったんだけど……。気付けば異世界ヘトリップしてしまいました。その上、私もおじいちゃんも魔法が使えるようになり、気付けばなにやらおおごとに。そんな祖父と孫娘が織りなすファンタジー（異世界最強系お気楽ファンタジー）です。肩の力を抜いて気軽に読んでいただければ。

第1話 私とおじいちゃん（前書き）

4／17追記…試験的に挿絵を入れています。イメージに合う合わない、こんなシーンなら挿絵が欲しい、などご意見ありましたらWB拍手などにいただければ幸いです。

>i22230—2977<

第1話 私とおじいちゃん

細かい振動音と揺れが一面を支配している、ある日の昼下がり。私の目の前にはたくさんのレストランがいて、地も空も多いつくすほど。

そしてその後ろにはヨーロッパの昔の建築物のようなレンガづくりの建物が立ち並んでいた。

まさに決戦前夜。映画でも思わず手に汗握る展開だ。ただ、それに輪をかけて悪いことに、この光景は映画ではない真正正銘の現実だったりする。

しかし、残念なことにそれに慣れて久しい私にはそこまでの緊張感も存在しない。だって私の目の前には――。

「爆発せい」

老境にさしかかった男性が放つ力強い言葉。それに呼応して大爆発が起こり地面を揺さぶる。

その光がおさまったとき、先ほどまで跳梁跋扈していた魍魎魍魎どもは、そのすべてが塵となっていた。

「おじいちゃんやったねー！さすが異世界一の魔法使いッ！！」

「うむ。しかしなアヤ、こういうときは一瞬の油断が大きな後悔を生む。だから抱きつくのは止めてほしいんだがのう」

私は目の前の男性、つまりは私の祖父に思い切り抱きつくけど、おじいちゃんは体幹を1ミリも揺らすことなく、先ほどまで怪物どもがいた方向に視線をむけながら優しく私を地面におろしてしまう。用心深いことだ、私のほうが走らせている《感知魔法》でもすでに怪物達の反応がないことを示しているのに。

「もう、おじいちゃんはこういうことには慎重なんだから。いつもは大胆に好き勝手なことばかりしているのに」

「ふむ、確かにそうかもしれないが、こういうときは別だ。それと……」

コホン、と咳払いを一つ。

「それと？」

「一つ訂正だ。ここは「異世界」ではないぞ。既に我らが暮らす世界^{トゥモ}なのだから」

——私とおじいちゃんは二人で地球以外の場所で暮らしている。
この《トゥモマーク》という異世界で。

□

その日私、床詠綾花^{とこよみあやか}とおじいちゃんは二人で旅行にでかけていた。
夏休みをつかった小旅行。

お父さんとお母さんは仕事で忙しいのでおじいちゃんに連れてきてもらったのだ。

「ふむ、さすがに夏の京都は暑いのお、アヤは大丈夫かな」

「大丈夫大丈夫、私はまだ若いんだし」

「結構なことだ。ワシなんて老人はもうだいぶ参ってしまっておる。
早く宿で一休みしたいものだ」

京都駅のターミナルにある階段を大きなキャリケース2つを軽々ともちあげながら、カカカと笑うおじいちゃんでは、かなり説得力に欠けるように思うんだけどどうだろう。

暑いといいながらもスタスタと歩くおじいちゃんは背筋をピシッと伸ばす姿はスーツ姿をあいまってただのビジネスマンにしか見えない。

うちのおじいちゃんは若い。私は高校一年で十五歳なのに、まだ六〇歳にもいってない。

それなのにもう隠居を気取って、娘婿、つまりは私のお父さんに事業を譲ってはいろいろなにやら画策しては実行しているらしい。

私はまだ学生ではよくわからないけど。

下手に事業の規模が大きいせいで世間的にみれば私は「深窓の令嬢」という扱いになっている。

それから移動すること1時間ほど。

「はあ……………」

「どうしたんだアヤ。ため息をつけばその分幸せが逃げてしまうぞ」

私はこのおじいちゃんが大好きだ。いろいろなところに連れていってくれるし、教えてくれる。そして優しい。それでも、だ。

「でもなんで山の上の旅館なのよ……」

「うむ、そこは昔からの知り合いが営んでいてな。まず眺望がすばらしい。それにご飯も美味しいぞ」

最寄りの駅から歩くこと数十分。なぜか『おじいちゃん健康のため』ということで旅館に続く山道——というよりも獣道、ほかに舗装された道があるはずなのに——を歩いている。

さて、このおじいちゃんはいぶ前に奥さん、つまりは私のおばあちゃんを亡くしている。私もおばあちゃんに会った記憶はほとんどないんだけど。でもみんなが言うには私は非常によく似ているらしい。そんな私は現在ロングヘアーをお団子にしてポニーテールにし、Tシャツに短パンという動き易い格好だ。髪は学校のときは

おろしているんだけど、こういうときはこうでもしていないと大変なことになる。

ショートカットにしてもいいんだけどなあ。帰ったら考えよう。そんなことを考えていると、目の前に木製の宝石箱のようなものが落ちていることに気付く。

「ねえおじいちゃん、こんなものが落ちていたんだけど」

「ほう、なにやら古びた箱だが……、まあ開けずにそのへんに……」
「ごめん、開けちゃった」

なんとなく興味を引いた私がそれを拾い上げ、ふたを開ける。

バサバサバサッ。

次の瞬間、私の視界は闇に覆われるのだった。

□

魔物退治を終えた私達はいまごやかいになっている街にもどってきた。

そのうちの屋敷の一軒が私たちの家だ。

この街はカリオリこの世界にいくつもある国のうちの一つだ。この《トゥマモーク》はいくつかの大陸に分かれている星だ。技術レベルは低く、代わりに《魔法》が発達していて、多くのものが《魔力》で動く。

「おかえりなさい、ヨシツグさん、アヤちゃん」

その屋敷のドアを開けると、耳がぴょんとがっている、ピンクブロンドの美少女さんが現れた。

現在、我が家に居候しているミリアさんだ。
いわゆる、『エルフ』さんでもある。

「ただいまーミリアさん、おなかすいたー」

「はいはい、アヤちゃん。ご飯の準備できてますからね」

「おお、それは良かった。ワシもご相伴にあずかろうかの」

「え、ええヨシツグさん。今日はもう腕によりをかけちゃいましたからっ。ぜひどうぞ!!」

なんかミリアさんの顔が赤い。まあいつものことだけれども。

私は目の前でわたわたとしているミリアさんを眺めながら、彼女と初めて出会ったときのことを思い出していた。

私たちがこの世界に現れた、まさにそのときのことを。

□

小さい箱から生まれた黒い霧につつまれた私達は、気づけば夕暮れときの森に投げ出されていた。幸いにして荷物はすべて無事のようで、おじいちゃんの大きなキャリアケースも私の旅行鞆もその辺に転がっていた。

「アヤ、大丈夫か」

おじいちゃんが声をかけてくる。全く動揺をしていない。その様子を見て私は少し安心した。おじいちゃんがいれば大丈夫ー。そんな私を見て一つうなずくと今度はまわりを見渡すと。

ふと、先ほどの小箱が目に入ってきた。ただし私が開けたはずなのに、そのフタは固く閉ざされていた。

「おじいちゃん、小箱が……」

「ほう。さきほどと同じものだな。さて、どうなっているか」

おじいちゃんはスタスタと小箱に近寄るとそれ持ち上げた。すると少しだけ眉間に皺を寄せる。はて、何かあったのだろうか。おじいちゃんに尋ねようとしたとき。

「どちらさまかな」

おじいちゃんが視線を向けた先に、ピンクブロンドの髪を揺らすの外国人のお姉さんが立っていた。

こちらの様子にびっくりしたのかなにやら言っているが全くわけがわからない。

「はじめまして、私は床詠といいます。失礼ですがここはどこですか？」

おじいちゃんは笑みをたたえたまま、英語、仏語、独語、スペイン語、ポルトガル語、しまいにはエスペラント語を使って同じようなことを言っているようだ。が理解してもらえないようだ。というかなんでおじいちゃんはエスペラント語なんて使えるのだろう。

そうこうしているうちにお姉さんは仕方ない、といった様子で人差し指をこちらに向け、何事か唱える。すると。

「さて、これであなた方の言葉がわかるようになったはずですが……。いかがでしょう？」

いままで何を言っているかわからなかったはずのお姉さんの言葉がネイティブな日本語に聞こえるようになったではないか。

「え！なんでっ、ええと……」

「落ち着きなさい綾花。これは失礼した。我々はどうやら道に迷ったようでの。知らぬ間にこんなところまできてしまった。よろしけ

れば少しおたずねしたいのだが。私は床詠吉継とこよみよしつぐという。こちらは孫娘の綾花」

「はじめまして綾花です」

「こちらこそはじめまして。私はミリア・ミートですわ。よろしかったらウチに寄っていかれませんか？ 街は今からいくと日が暮れてしましますし、少しその箱のことでお尋ねしたいことがありますの」
「それはありがたい。渡りに船とはこのことですな。よろしく願いいたします」

それから歩くこと数十分。確かに彼女の言ったようにあたりは暗くなり、星のまたたきが見えるようになってきたころ、彼女の家

に到着する。

はー、びっくりだわー。

森のすこし開けたところにお城のような大きな館がそびえたっていたからだ。

入口のところには、執事さんらしき人が立って出迎えをしてくれている。

ちなみに服装はバトラースーツ。絵に描いたようにばっちり似合っていた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「ええ、ただいま。今日はお客様をお連れしたから客間の準備をよろしくね」

美人さんの発言で私たちの存在に気付いたようだ、一瞬だけ、いぶかしげな表情を向ける。

「はて、御来客の予定はなかったように……」

「だって今さっきお客様になったんだもの」

クスリと笑う美人さん。

「承知しました。それではお客様、早急に準備いたしますのでしばらくお待ちを」

「時間なら大丈夫よ。私今からこの方々とお話することがあるの。第一応接室、あいているでしょう？」

応接室に通されてしばらく。ことの顛末をおじいちゃんが説明する。

すると彼女はすぐに合点がいったようだった。

「なるほど……。わかりました。つまりあなた方は異世界からの漂流者というわけですね」

「まあ、そうなりますかな」

カップに口をつけながらおじいちゃんは何んでもない様子で同意する。

「いやいやいや、私そんなの全く聞いてないから。っていこうか異世界って何よ。」

確かになんか服装とか家とかちよつと……。いやかなりおかしいなーとか思っていたけどさあ。

「おじいちゃん、私そんなの聞いてない！」

「まあそう声を荒げるでない。先ほど、こちらに伺う途中、星の配列をみておったが、日本、というか地球とは全く違うのじゃから。でミリアさん。これを使えば我々を元いた場所に返すことは可能かの」

ミリアさんは沈痛な面もちで視線をテーブルに下げた。つまり厳しい、ということなのか。

「ふむ、そうか。ではもう一つ聞かせてほしい。」
「これらは換金可能ですかのう」

「ごそごそとおじいちゃんが鞆から出したそれは。
見たこともないほどの大きさの宝石達だった。」

第2話 おじいちゃん、魔力に目覚める

ごろごろ。そんな形容詞が似合う大きさの宝石が机の上に並ぶ。なんかどこぞの成金さんみたいな派手な品物の数々。いや実際ウチの会社はおじいちゃんが一代で築きあげたのだから、成金といわれても仕方がないんだけど。実際私が小さいときはそんな陰口もたたかれたような気がする。

しかし私の驚き以上に、目の前のミリアさんは驚愕の眼差しを私たちに向けていた。

「これは……？」

「いや、『元の世界』ではちょっとおおきな会社をやっておりましてー。うむ、『会社』の概念がそちらの世界であるかわかりませんなあ。つまり、危険への備えというか、ワシはいつもなにがあってもいいように、財産の一部をこういった形に変えておるのですよ」

そんな話は私も初耳である。

というか宝石はどこにしまってるんだろうか。そこで私はハタと気づく。あんな大きいキャリーバッグを持っている割にはおじいちゃんの服が少な目なのは、ああいったものが満載だからなのかもしれないと。

「そりゃあアヤ、男の秘密というやつじゃよ」

「あれ、声にでてた？」

「うむ。しつかりとな」

くすくすとミリアさんにも忍び笑われた。恥ずかしい。

「さて、ミリア殿、そろそろワシの質問に答えてもらえないかのう。

この宝石はこちらの世界で売れるのかな」

「あ、ああそうですね。これだけのものではたら大きい街の宝石商に持っていけばかなり良い値で取引していただけるのではないかと。さすがに相場は私にはわかりかねますけど」

「つまり、引き取ってはくれるということか。いや、それがわかっただけでも大変ありがたい」

おじいちゃんはそういつて右手で自分の頬を撫で始める。私は知っているあいった様子のおじいちゃんはいわゆる『仕事モード』になっている。穏和なおじいちゃんだけど、現役のころはものすごかったらしいからなあ。お父さんなんて未だにそのこと夢にみるらしいし。

それからしばらくの間おじいちゃんとミリアさんは様々なことはなしていた。世界のこと。政治のこと、経済のこと。私も当然だけれど初めて見聞きすることになる話ばかりでわくわくしながらメモ帳にペンを走らせていた。

「ふむ、ざっと聞いたところ、1ドル＝1セナールといった感じかの」

「どる、が何かは存知あげませんが、この世界ではすべての国で共通の貨幣セナールを使えますわ」

「ほう。それは進んでおるのう。うちの星なんぞ未だに国によって違うというのに」

「といってもここ数十年といったの話なんですけどね」

上品に笑う彼女に、ふとした疑問が蘇ってきたので尋ねてみる。

「そういえば、最初ミリアさんが私達にしたのは何なんですか。急に話を通じるようになったんですけど」

私の質問にキョトンとした表情を見せるミリアさん。くそうそんな表情でもかわいいのは卑怯だ。その上胸も企画外な大きさで……。なんとなく下を向いて確認したくなったがむなしくなるだけなのでやめておいた。

質問の意味を理解したミリアさんが親切に教えてくれる。

「いえ、ただ単に《翻訳》の魔法をかけたただけなんですけど……。そんなに珍しかったですか？」

おじいちゃんが笑みを浮かべてそのミリアさんの問いに答える。つまりそんな《魔法》なんて代物知りませんし、使えませんよということ。

「ああ、なるほど、だからお二人からは何の魔力も感じられなかったのですね」
「やはりそうですか。住んでいるところの違い、というやつですか」

すこし残念そうに、おじいちゃんは肩をおとすそぶりを見せるが。

「いえ、そんなことはありませんよ。程度の差こそあれ、誰でも魔力があるはずです。それは過去の異世界からの来訪者の記録からも明らかですから。あなたがたもしかりと手順を踏めば問題ありませんわ」

あっけらかんと目の前の少女は言う。

それを聞いたおじいちゃんの目がキラリと光ることを私は確認した。ああ、こういったことおじいちゃん大好きだからな。いわゆる技術系経営者だったし。

「せっかくだからその手順というものを私も体験してみたいのが……。どうすればよろしいのかな、ミリア殿」

「簡単ですよ。まあいろいろありますが、一番簡易なのは……。そうですねー」

そう言いながらミリアさんがおじいちゃんが座るソファのほうへ行き、その横に座る。しかし警戒感とか無いのだろうかこのお嬢様は。

でも、さきほどからの話を聞く限り、ミリアさんは高い教養と知性を兼ね備えた人だったことはよくわかった。最初に出会ったのが彼女でほんとラッキーだったのかもしれないの。

興味深そうに見守るおじいちゃんの顔にミリアさんは自分の顔を近づけると……。

な、なるほど。これはき、キスね……。確かに王道だわー。

なんて、よこしまな私の想いは通じなかったようで。

おでことおでこがぴたっと合わされただけだった。

なんだ、残念。

「ここ《トウモマーク》の万物を統べる聖霊よ。かのものに祝福を。かのものに光を。かのものにあるべき力を与え賜え」

ミリアさんから紡がれる言葉。それはは巫女の託宣のような神聖さすら感じられるものだった。

そして次の瞬間ー。

ぶわっ、とおじいちゃんから何かの熱い『流れ』がすごい勢いであふれだしてくる。ミリアさんも驚いておじいちゃんから離れる。

な、なんのこれはッ！

「ほう……。これはすごい。なにかあふれてくるようじゃ」

「いや、あの、実際漏れてるんです《魔力》が。えっとでもこれ、

何、ものすごい密度と圧力……、これちゃんと調べないと……。いえそんなことは今はいいです。とりあえずそれを止めてください」
「そんなこといってもものう。どうやって止めるんじゃ？」

確かにもっともな意見だ。だって私達魔法とか魔力とかそんなから無縁な世界からやってきたのだから。

「心を落ち着かせて。体からでる魔力を体内にぐるぐる循環させるイメージをもってみてください」

「なるほど。では……」

おじいちゃんは目をとじ、両手をお臍の下、いわゆる丹田といわれるところで組む。そうするとすぐに《魔力》の流出は収まった。

「はあ、すごいですね。私が口で言ったただけなのに、すぐに魔力をコントロールしている……」

「いやいや、ミリア殿のアドバイスが適切だったんじゃよ」

ふよふよと手近にあった宝石を浮かべて見せるおじいちゃん。それをほほえましそうに見ているミリアさんの頬を一筋の汗が伝っていた。なんでだろう？

それからすぐに執事の人が出来てきて、私たちの部屋の準備ができたことが告げられた。

ミリアさんはまた明日お会いしましょう、といってくれた。どうやら明日も一緒にできるらしい。まだ聞きたいことはたくさんある。それから私たちはご飯を食べてお風呂に入って。部屋は二人で泊まるには大きすぎるサイズで一流ホテルのスイートルーム並みの広さ。さすがお金持ち、という感じの部屋だ。

そして私はまだお子さまなのでおじいちゃんより先にベッドに入

る。幸いなことにご飯もお風呂もベッドも元いた世界とほぼ同じようなものだった。これで全然文化が違っていたらと思うとぞっとする。

そんな私はベッドにもぐりこみながらふと考える。本当に帰れるんだろうか、と。

ただそんな不安も疲れがたまっていたためか、あっさりと眠りにいざなわれちゃう私なのであった。

次の日の朝。目覚めたとき、おじいちゃんは部屋の反対側に座って本を読んでいた。

ただ、ちょっと。いや大分その読み方が変わっていて。

「おはようおじいちゃん。……何しているの？」

「おお、おはようアヤ。なに、ただの読書じゃよ。この読書魔法ってやつは本当に便利だな。そしてこの世界自体も大変興味深い」

そういつておじいちゃんは顎をさする。

そりゃ便利なんだろう。一度に五冊も六冊も本を浮かべては高速でめくっていれば。

なんだかおじいちゃんを見ると昨晚一瞬襲ってきた不安も徒労のような気がしてきて。そのまま私は布団をかぶり二度寝としゃれこむのだった。

第3話 おじいちゃん、たぶらかす

「はあー、やはり朝にいただくお湯は最高ですわね、アヤカさん」
「……………そうですねミリアさん」

広い湯船を備えた、見るからに高級そうな浴室。なぜか私は朝風呂に誘われて一緒に入っている。そして目の前にはこのお家のお嬢様たるミリアさんがいた。カテゴリ的には私もそっちに入るはずなんだけど、なんか違うんだよなあ。私のほうがやばったいというか。特に玉のように艶やかで白い肌とか。惜しげもなく私の目の前にさらされているその肢体は出るとこは出て、引っ込むところは引っ込んでいてとてもうらめし……、いや羨ましい。

なんだかのぼせそうになった私は一足早く湯船から出て体を洗わせてもらうことにした。

蛇口に魔力を通すとお湯がでる洗面台。それに魔力を通してお湯を出し、体を洗う。

あ、ちなみに朝、私も《魔力解放》の儀式をしてもらったので、魔力が使えるようになったのだ。これは素直にうれしかった。魔法少女は女の子の成長期の一時代における一つの憧れなのだから。

「お背中流しましょうか、アヤカさん」

「ひゃっ、い、いえ結構です」

「まあまあ、昨日から苦労の連続でしょうし。いきなり違う世界なんですから気が張ってしまうのは仕方ありませんが、せめてお風呂のときくらいはリラックスしていただかないと、ね」

そういつて後ろから抱きついてきてよしよし、とされる。

あ、当たってるんですけどっ！！二つのお腕型のそれは、タオル越しとわかってもしっかりと存在感を主張しており、同性である私

でもドキドキしてしまう。

そういえばこのミリアさん年齢が二つしか違わないらしい。それがこの世界に来てからの個人的には一番の驚きだった。あんな強力な代物をぶら下げているのにそんな……、バカな。

「しかし、アヤカさんのおじいさまはすばらしいですわね。まずあの魔力……。でもそれだけではなく、博識でらっしゃるし、なにによりあの凛々しいお姿が」

うつとりとした様子でミリアさんが私の背中を流しながら話かける。

「ええ、確かにそうですね。自慢の祖父です」

「魔力が多い、イコール偉大な魔法使いというわけではありませんが、あの魔力量は私が知る限りでは……。ええもちろんアヤカさんもすごいんですよ、びっくりです」

申し訳程度にミリアさんにそう付け足される私。

魔力。これはこの《トゥモマーク》に住むすべての人がもっているもの。そしてこの世界にはしばしば異世界からの来訪者が訪れるらしいが、そんな彼らも例外なくこの世界では魔力を有する。

魔力量は人が一度に行使できる限界量みたいなもので、これが大きければおおいほど魔法を使うのに有効らしい。

で、今いったようにおじいちゃんとは異常なほどこの魔力量が多いらしいのだ。ちなみに私も結構なものときき言われた。

「私の場合は人間にしては、といったところで」

少し口をとがらせながら言う私にミリアさんが苦笑する。

「もう、アヤカさんって言い方が悪かったですわ。アヤカさんの魔力はエルフのなかでも高位の術者並なんですよ。それも現時点で」

いまさら言うまでもないが、ミリアさんはエルフという種族だ。

この世界には人間以外にも様々な種族がいるという。その事実には私はため息がでる思いだった。

湯船からあがると、なにやらざわついた雰囲気を感じる。

不思議に思った私はきよろきよろとあたりを見回すとその視線がすべてある方向を向いている。

中庭のほうだ。私も吊られてそっちを見ると――。

上半身をあらわにした私のおじいちゃんが立っていた。

その珍妙な出来事に私は思考停止するが、すぐに再起動するとダッシュでその場に向かう。

「おじいちゃん！何やってるのッ！！それじゃあただの変態さんじゃない。まったくせっかくご厚意で泊めていただいてるのに！！」

すごい剣幕で吠えたてる私を、おじいちゃんはタオルで汗をふきながら柳に風と受け流す。それにしても昔から思うんだけど、おじいちゃん、すごい筋肉だ。腹筋とかもちゃんと割れてるし。なんか色々武術をやっているらしいけど詳しくは知らない。

「いや、これはおまえが言ったのではないか、アヤよ」

「私が言った？」

はてな、私おじいちゃんに上半身露出して運動しろなんていったっけ。

「昨晚言っていた『修行』っというやつじゃよ」

あー、そういえば昨晚寝る前にこんなやりとりをした記憶がある。
『そういえば何か最近よい修行法とかないかのう』

『あ、それなら《感謝の正拳突き一万回》とかどうかなあ（マンガの話だけど）』

『ほう、おもしろそうじゃなあ。どんなのかの』

『かくかくしかじか………』

そうだそうだ、そういつて詳しく説明したのは私だったのだ。私のほかばか。自責の念にかられている私をよそにおじいちゃんは腰を落とすと目を閉じ、静かに腕を引く――。そして。

おじいちゃんの拳は音を置き去りにして、放たれた。

「えっおじいちゃんこれって……」

「ほほほ。魔力とは結構な代物だのう。肉体的強化もできるとは聞いていたがこれほどとはな」

いやいやいや、私が昨日おじいちゃんと一緒にミリアさんに聞いたのは『魔法のなかには肉体能力を一時的に底上げできるものもある』だったはずだよ？

そんなどこかの某協会会長みたいなまねができるようになるなんて聞いてないですから。それおかしーですから。たぶんおじいちゃんが異常なだけですから。

だからか。周りの方がすごい雰囲気になっていたのは。

私がいまさらながらに頭が痛くなっていると、ミリアさんが中庭にやって来た。私が血相変えて走っていったので見に来たのだろう。そして間の悪いことに彼女は中庭にあった石につまづいて――。あぶない、そう思ったとき彼女は顔面から転――ばなかった。

前のめりの不自然な姿勢でぴたりと彼女が、止まる。

左手を突き出したおじいちゃんがその手を少し動かすと、ふわりとミリアさんは立った状態に戻る。

「あのありがとうございます、」

「いやいや。昨日から大恩をいただいておる。これくらいおやすいごようじゃ。あと、ワシのことはヨシツグでいい、ミリア殿」

「は、はいっ……よ、ヨシツグさん」

おじいちゃんは人好きのする笑顔を浮かべる。

ただこけるのを防いだけなのに、ミリアさんの顔がすごく赤い。それから場所を変えて、またミリアさんにいろんなことを尋ねた。結局わかったことといえば、

・あの箱はもともとミリアさんの家のもので、いわゆるマジックアイテムというやつだった。ゲート魔法といわれる、ある場所とある場所を結ぶこの世界でも稀少なもの。

・盗人が入り、箱を含めていくらかのものが盗みだされた。

・犯人は捕まったが箱は逃走途中で落としたと主張。

・数週間後、つまり昨日、魔力の反応がして、もしかやと思ってきてみたら私たちがいた。

と、いうことらしい。つまりあの箱を盗んでその上落とした犯人がすべて悪いのだ。

そして箱は魔力をほとんど使い果たしたただの箱になっている。：

……最悪だ。

しかしおじいちゃんは紳士的な表情を崩すことはない。

ちなみに、私たちはいまこの《トゥモマーク》での標準的な服装に着替えている。さすがに短パンはこの世界ではあまりないらしく、私はゆったりとしたワンピース姿で、髪の毛もおろした状態だ。

ミリアさんとのお話が終わるとこの家のご主人、つまりはミリア

さんのお父様がお話があるということ、これはおじいちゃんの希望でおじいちゃんだけが会うことになった。

どうせとんでもない話をするんだろう。

おじいちゃんが会議にでている間には、ミリアさんにお話相手になってもらって魔法を何個か教えてもらった。ふふふ、これでおじいちゃんをおどろかしてやるんだから。

そして、予定の時間を大分オーバーしておじいちゃんが戻ってきた。ちなみにこの星の公転周期やらなんやらは地球のそれとそんなに変わらないらしい。

大きく違うのは一日がこの世界では25時間くらいであるといったところだろうか。

「いやいや、この世界は興味深いことが多くての。つい話が長くなってしまった。さて、日本に帰る手段を確立せねばならんが、しばらくはどうにもならん。これが昨日、今日こちらの屋敷でお世話になって判明した事実だ。で、アヤはどうしたい」

「うん、私は帰りたい。でもかといって帰れない事実にしよげてたら床詠の人間として恥ずかしいし……。とりあえずなんとかこの《トウモマーク》で生きていかないと。そのへんおじいちゃん考えてくれるんでしょ？」

そうなのだ。嘆いていてもはじまらない。「来れた限り、帰る手段はある」はずなのだから。

「それでこそ我が孫娘よ。気丈などこまでバアさんそっくりじゃわい。さて、そんなわけでここにずっとご厄介になっておくわけにもいけないのはわかるな」

「もちろんだよ」

そうなのだ。生活の基盤は早急に確立しないといけない。衣食住。

これらは生活をしていく上で必要不可欠。幸いなことに、当面のお金の心配は必要なさそうだし。そのうえ私は学生だから、こっちにあるのかわかんないけど、こっちの学校にも通いたい。

長期的にはお金を得る方法を考えないといけないけどそのへんはおじいちゃんの得意分野だから大丈夫だろう。

「そういうわけで、街にお屋敷を一つ買ったので、今日からそこに住むことになった。今から出発じゃ」

え、なんでそんな簡単に家一つ、ぽーんと買っちゃうの、おじいちゃん？

第4話 おじいちゃん、精霊さんといつの間にか契約する

おじいちゃんの宣言から数刻の時間がたち、いざ出発のときがきた。

まあ、私たちは日本からこの《トウモマーク》にとばされてきただけなので、準備するものなどほとんどない、はずなんだけど。

なんでこの馬車（馬っぽい動物が車を引いているのだからこの表現であっているはず）にはこんなに一杯の荷物がのっているのだろうか。

餞別の品だとすればありがたく頂戴するのだけど。

その上、このことをおじいちゃんに問いつめようにも、ミリアさんのお父さんとまたどっか行っちゃったし。

この疑問は、意外にも隣にいるピンクブロンドの髪を肩で切りそろえている美人さんが解答を提示してくれた。

「それは私、ミリア・ミートがご一緒させていただくからなんですけど……。不都合がありましたでしょうか？」

「あ、いえ送っていただくのはありがたいのですが、ちょっと荷物が多いなー、なんて」

ぽん、とミリアさんが手をたたく。どうやら私はなにか勘違いをしていたらしい。

「ああ、説明が不足しておりましたわね。私もアヤちゃん達が今くらいく《カリオリ》に住んでおまして。今はたまたま帰省しているだけなのです。それで折角ですから私も一緒に《カリオリ》に帰ろうかと思ひまして」

なるほど、だとすればあれはすべてミリアさんの荷物なのか。餞別じゃないとわかってすこしがっかりする。

そういえばミリアさんの私に対する呼び名がいつの間にか「アヤカさん」から「アヤちゃん」に変わっていた。たぶんおじいちゃんが私のことを「アヤ」と呼ぶからなんだろうけど。

「なるほど。そうなんですね。知り合いがいるというのはそれだけで心強いですから。私も街にちゃんとなじめるのか心配だったんです」

確かにそうなのだ。知り合いが一人もないところに放りだされるより、そのほうがよっぽどよい。本当にミリアさんっていい人だよね。

「そう言っていたけると嬉しいわ。街の案内でもさせてもらうけど……。ねえアヤちゃん、ヨシツグさんどうおっしゃるかしら」

「祖父も喜ぶと思いますよ、是非よろしく願います」

「ヨシツグさんも喜ぶ……。わかりました！ 全身全霊をもって街を案内させていただきますね」

いや、そこまで街の案内に情熱を向けられても困ってしまいますのですが……。

それにしても遅いなあ、おじいちゃん。お屋敷が大きいから迷子になっていたりするのではなったりして。それだと大笑いしてあげるんだけど、などと考えているうちに。出入口からおじいちゃんを始めとしていくつかの人影がでてきていた。

「アヤ、またせたな。そろそろ《カリオリ》に向かおうとしよう」
「ああ、うん。なんかミリアさんと一緒なんだってね。知らなかったよ」

「そうか。ワシも初耳じゃなあ。しかし馬車も用意していただいておるしワシらが断る理由はないの。むしろお願いしたいくらいじゃわい。そして道中も人のおおいほうが楽しい」

「ヨシツグさん、ありがとうございます」

おじいちゃんも初耳なんだ。もしかしてミリアさん、強引にねじ込んだのかしら。そうだとしたら、やるわね。

あれっ？そこで私はあることに気づいて尋ねようとするんだけど……。

「いやいや、こちらこそじゃよ。ミリア殿がいれば頼もしい。よろしく」

「ねえ」

「は、はいッ……。それでよろしければ明日でも街中を案内しようとアヤちゃんとさっき話していたのですが……」

「ねえねえ」

「それはありがたい。ご好意に甘えてばかりで申し訳ない限りだが……いいのかね」

「ご好意なんてとんでもないですわ。そもそもは私どものマジックアイテム管理が十分ではなかったためにヨシツグさん達がこっちの世界に……」

「ミリアさんが気に病むことではない。悪いのは賊なのじゃから。せつかくの美人さんがだいなしじゃぞい」

「ヨシツグさん……」

「ねえ、おじいちゃん!!」

天然ジゴロっぷりを発揮しかかっている我が祖父を現実に連れ戻すべく、私は声をあげた。
なぜなら――。

「その子、だれ？」

「ああ、この娘はなあ……」

おじいちゃんの傍らに一人の少女をつれていた。緩くウェーブがかかった金髪を腰まで伸ばし、瞳の色はワインのような赤。見た目は……10歳いってるかどうかといったところか。

そして特筆すべきは十人に聞けば十人とも美少女と答えるほどの器量良しさんだということだ。

おじいちゃんが優しくな視線をその女の子に向け、頭を一つくしやりと撫でる。

「ミスト殿のご好意での、すばらしい餞別をいただけることになったんじゃよ」

餞別、はて何をもらったのか、とほかを見渡しても該当するものはない。ちなみにミストさん、というのはミリアさんのお父様のことで、おじいちゃんの少し後ろで苦笑を浮かべながら少女に視線を向けている。

「もしかしておじいちゃん、その子が……？」

「そうじゃよ」

許せない。年端も行かない少女を「餞別」扱いだなんて。

人身売買、それも小さな女の子は立派すぎるほど重大な犯罪ですよーが。

「おじいちゃん、いくら異世界で人権の感覚が違うからってそれはちょっと……。もしかしてもこの国じゃそれは犯罪じゃないかもしれないけど。すくなくとも私の目の黒いうちは絶対に許さないよ！」
「アヤちゃん。さすがにそれは私達の国でも犯罪よ……」

私がまくしたてる横でミリアさんのフォローがはいる、だけと言われてる当の金髪の女の子はまったく気にすることなく、おじいちゃんの横に寄り添っている。

「アヤ、この娘のことが気に入らんのか？」

「いや、論点はそのじゃなく……」

「お爺様。この方がアヤカねえ様？」

私の発現を制すように、あまり温度のない声というよりも眠そうな声で少女はおじいちゃんに尋ねた。

「うむ、そうじゃよ」

その答えを聞くなり、彼女はとてとてとてー、と私の元に近づいてくる。そしてぺこりと一礼。

「はじめましてアヤカねえ様。私の名はノモルシー。これからよろしく願います」

こ、こんな可愛い娘をかどわかすとは……。おじいちゃん、まじ許すまじ。

あ、ミリアさんもかわいさにやられたみたい。いつのまにかノモルシーの近くにきて、いろいろと質問していた。

「さて、アヤ。少し誤解があるようじゃが。ワシはミスト殿にマジックアイテムを餞別としてもらったんじゃないよ」

「はあ……」

なるほど。さきほどの発言はもらったアイテムに対してか。では

それが目の前の少女とどうつながるのか。

「この子、ノモルシーは、ワシが契約をしたそのマジックアイテムの意志、いわば管制人格、わかりやすく言えば精霊さんじゃ。たしかに表現は適切ではなかった。すまんかったなノモルシー」

「……私は気にしない。でも気をつかってくれてありがとう、お爺様」

えっ、この子、人間じゃないの？精霊、なにそれ？

その上おじいちゃんと契約してるって……。

いけない、私の灰色の脳細胞が理解不能な出来事の連続でショートしているみたい。

そこからでた私の結論は——ああ、早くお家（仮）でゆっくりしたい。——

まだ街に向かって出発すらしていないのに、わたしはそんなことを考えるのだった。

第5話 おじいちゃん、建築する

旅は道連れ世は情け。そんな言葉がふいに私の脳裏に浮かぶ。でもその意味について、私は残念ながら日本に置き忘れてきてしまったらしい。

《トウモマーク》滞在二日目。

私達は馬車に乗って四人旅である。昨日までは二人で、本来この街へも私とおじいちゃんだけでくる予定だったので当社比二倍、というやつだ。

ホントうさんくさい比較の仕方だなあと心のなかで毒づく。

「ほらアヤちゃん、見えてきましたよ、あれが《カリオリ》の街です!!」

きれいな煉瓦づくりの建物が並ぶ町並みが見えてくる。海に面しているそれは、夕日に照らされ赤く輝いていた。

「へえ、綺麗ね……」

ミリアさんは馬車の席を決めたときから常にテンションが上がりっぱなしだ。たぶんその理由は、彼女の隣に肩がつかんばかりの距離でおじいちゃんが座っているからなのだろう。

ちなみに私の隣は必然的にいつのまにやら『妹』になったノモルシーが座っている。

そういえばおじいちゃんがもらったこの娘が宿っているマジックアイテムが何なのか聞きそびれたことを思い出す。

ノモルシーのほうを見ると、彼女も無言で町並みを眺めていた。ここ数時間でわかったこと、それは彼女が無口でおとなしい少女であるということだ。

それでも彼女は、街の様子がみえるようになってからというもの、ぷらぷらと足を所在なげに揺らしている。うれしさの表現なのだろうか、これは。

「結構大きいんですね、この街は」

私は視線をミリアさんに戻して、尋ねる。

そう、私達が目指す街は想像よりもずっと都会だった。

「うーん、まあ街の規模としては中くらい、といったところでしょうね。機会があったら都とか行ってみるといいですよ。もっとすごいですから」

「へー、機会があったら行ってみたいですねー」

それまでに逝ってなければ、だけど。

「うむ。なるほど都か。ワシも気になるところじゃな」

「ノモルシーも」

そうやってわいわいと騒ぎながら目的地に向かう。

不安は多いが当面はなんとかかなりそうだと楽観的に私は考えている。

しかしその希望的観測は初っぱなから見事に打ち砕かれたのだ。

廃墟。

まさしくその言葉そのものの3階建の建築物が私達の前にそびえ立っていた。

お家というよりも、小さなビル、といった感じの大きさで、二人、いや今はノモルシーも入れて三人か、住むには大きすぎるほど。

うん、外観はそんなにひどくないんだよね。大通りにも面してるし。

問題は中身。ドアノブがもげかけた扉をなんとかして開けた私達の目に飛び込んできたのは、夜逃げかなんかをしたかのような惨状だった。建築資材が散乱して、平らなところがないほどで、証明設備などは絶無。

もちろん人が住めるような環境ではない。

「おじいちゃん……。ここに住むの？」

「もちろんじゃよ。ふむ、なかなか頑丈そうな材質でできた建物じゃ。いい買い物をしたな。今度ミスト殿にお礼をしなければな」

私が少し暗い声色でおじいちゃんに尋ねる。おじいちゃんはずいぶん機嫌だった。はあ、だめだこりゃ。

「アヤちゃん仕方ありませんわ。昨日の今日のことですし。手配すればすぐに住めるようになりますよ」

たしかにそうだ。とりあえず今日はもう遅いし、どこかで宿をとって、明日から少しづつ住めるように……。はあ先行きは長いなあ。そんなことを考えていたのだけど。

「ふむ。ミリアさん、家の整備をお願いするとして最短でどれくらいかかりますかな」

おじいちゃんの質問に、左手を頬にあてながらミリアさんは少し考えて答えた。

「私自身はあまりこの手のことに詳しくないので正確ではないかもしれませんが、早くて二週間程度ではないでしょうか」

「なるほど……」

すでに日は落ちかけている。つまり二週間くらいは仮宿暮らしということか。

まあ仕方がないなあと思っていたとき。

「さて、ではもう一つ尋ねるが……。人目をはばかるための結界魔法などは使えたりするかの、ミリアさん？」

ふたたびおじいちゃんが質問する。

ちなみに今おじいちゃんがいる魔法はある場所を指定してその外からは中からの光や音を漏らさないようにするものだ。ここに来る途中で読んだ本にたしかそう書いてあった。

「ええ、使えますけど……」

「ノモルシーも使えるわ、お爺様」

ミリアさんはきよとした顔で答え、聞かれてもないのにノモルシーも答える。

「ありがとう二人とも。ではミリアさん、この建物敷地の境界線部分までその魔法をかけていただけないだろうか。あと、ノモルシーには別のお願ひがあるんじゃないか……。だめかのか？」

「おやすいご用ですわ、ヨシツグさんのお役にたつのなら」

「ノモルシーもわかった」

そういつてミリアさんは目をとじ、何事か詠唱する。

すると、あわいピンクの光りが建物と家の敷地全体まで広がり、消えた。

それからここの空気が変わったような気がする。つまり結界が張

られた、ということなのだろう。

「ありがとう、ミリアさん。ではノモルシー、少しこちらに来なさい」

私の横にいたノモルシーはトテテとおじいちゃんの傍らへ。並んで立つ二人。

おじいちゃん達は正面から建物に向き合い、私とミリアさんはおじいちゃんの陰に隠れるように立っていた。

「さて、ではアヤ、ミリアさん。しばらくそこにおってくれ。あとちょっと騒がしいがそこは勘弁願おう」

おじいちゃんは手をノモルシーに差し出す。

その手を彼女の小さい手が、ゆっくり握り返す、そのとき――。ドスンという低い音をたてて、建物はあっけなく崩れおちた――。

「お、おじいちゃん、なんでいきなりそんなことを……」

「ヨシツグさん……?」

私達が絶句してその光景を眺めていると、今度は。

コトリ、コトリ。

崩れ落ちた瓦礫が浮き上がると勝手に整列を始めて……。

あつというまに、まさに建物の建設がはじまるかのような状態――私たちが普段よく見る工事現場のように――整理される。

そして、一気に今度はその資材達が空に浮き、組合わさり、そして形を変えていく。

えっと、つまり家を作ってるってことかしら、これは?

「多系統魔法同時励起……ッ!!」

うわずった声が聞こえてきたのでそちらに目をやると、ミリアさんが興奮、というか恍惚のまなざしでおじいちゃんの一举一動を見守っていた。

彼女大丈夫だろうか。なんか端正な顔がやばい方向にイっちゃってるんだけど……。

そしておじいちゃんとノモルシーはといえば、魔法を行使しているためか、手をつないだ状態でぼんやりと光を放っている。

「あの……みりあさん？」

「ああ、素敵すぎますわヨシツグ様……、じゅるり。あ、アヤちゃんこれは失礼しましたわ。はしたないところを……」

「いえ、それはいいです。アレ、なんですか？」

私はミリアさんの痴態を「見なかったこと」にして、早急にさっきの言葉の説明を求める。気をとりなおしたミリアさんが興奮冷めやらぬ様子で私に説明してくれる。

魔法。それは魔法^{マジックプログラム}礼式と術者の魔力を組み合わせる現象――。

そう《トゥモマーク》では定義されているんだそう。

魔法礼式は心に思いうかべてもいいし。口に出してもいいし、何かに彫ったり記録したりしたのでもいい。

そして魔法礼式は魔法言語というものでできている。

魔法言語は、魔法の性質によって使われるものがある。たとえば何かを召還する《召還魔法》と物をつくりかえる《錬金魔法》では魔法言語そのものが異なる。

そして、普通同一人物が複数の魔法言語のものを同時に行使することはない。

だってそれは英語と日本語を同時にしゃべっているようなものだから。

「まあ、そんなありえないことをおじいちゃんがやってのけてる、と」

「ええ。今日の前で起こっているのは、少なくとも物を動かす《精霊魔法》と物の性質を変化させる《練金魔法》の組みあわせですの……。ああ、ゾクゾクするほどすばらしい……」

また表情がうつとりしたものにもどってしまったミリアさんを横目に、私はため息をつく。

「はあ……。まあおじいちゃんの変態さんなのは昨日痛いほどよくわかりましたから、今さら驚いてもカロリーの無駄ってやつですが……。それよりミリアさん、本当にお詳しいですね。やっぱりこの世界の人は皆さんミリアさんみたいに魔法に詳しかったりするんですか？」

「いえ、私が少し変わっていると申しますか、ちょっとマニアックと
いうか……」

つまりマッドサイエンティストの魔法版、といったところのなの
だろう、恥ずかしそうにミリアさんが告白してくれた。

そしてそのころには、おじいちゃんの《建築工事》はすっかり終
わっていた。

「ノモルシーが居ると、作業が楽でいいのお。疲れてはおらんかの
？」

「お爺様ありがとうございます。でもノモルシーが手伝わなくてもこれくらい
はできるハズ。あとお爺様の制御のおかげで疲れはない」

「いやいや。すべての系統魔法はまだ網羅できておらんからの。精
密な作業は一人では骨じゃ。ほんと助かったわい」

盆栽の手入れをしたおじいちゃんとその孫、といったくらいの気
安い会話。

そしておじいちゃんにくしゃくしゃと頭を撫でられて、ノモルシ
ーはうれしそうに目を細めていた。

「そしてかなりの難作業なのにノモルシーちゃんを気遣うあの余裕。
ジェントルマンですわ……」

ミリアさんがその様子を見ながらつぶやく。

こうして、過程はともかくとして私たちは《我が家》を手に入れた
のだった。

あとミリアさん？おじいちゃんがこちらを向く前に、口から垂れ
ている涎、拭いたほうがいいですよ？

第6話 おじいちゃん、手続きする

なんとかお家も決まって、とりあえずの「住」は確保できた。

おじいちゃん曰く、この3階建のうち、居住部分は2階に造ったとのこと。

なので私はさっさとお部屋に行って寝るべく部屋に行く。

そんな私の目に飛び込んできたのはキングサイズのベッドだった。ちなみに天蓋つき。

へえ、ベッドまでしっかり作ってるんだー、魔法って便利ー。

私は若干投げやり気味になりながら、ベッドにダイブ。ふかふかである。

ただ、こういったのはさすがに私とおじいちゃんの部屋にしかないし、ほかに必要な家具類はほとんどない。

あー明日は一通りやることやったあと、家具とか買いにいかなくちゃなあ。

そういえば、ミリアさんなどは自分の家があるのに「少し遅くなりましたし、もしよろしければ今晚はご一緒させていただければ……」。でも部屋を用意していただくのもお手間ですから、ヨシツグさんの部屋の片隅で……」などと、聞きようによっては女性として大問題なことを言っていたが、おじいちゃんの鉄壁の守りによってことなきをえた。

ただ、さすがに親切心から出た（たぶん）提案なので、とりあえず今日はウチに泊まってもらうことにした。

もっとも、気になることが一つだけ。

乗ってきた馬車とそれを動かしてた従者さんは帰っただけ……。ミリアさんはその馬車に積んでいた荷物をウチにいられたんだけどー。まさか、住まないよね？

そして私の部屋のほうといえ、私以外にはもう一人住人がいた。

ノモルシーだ。

そこで一つ問題発生。彼女は精霊さんなので寝間着なんてものを持っていない。だから予備のパジャマを貸したのだけど、当然サイズがちがうのでだぼだぼ。手より袖のほうが長くてぷらぷらしている。

うーん、今日は仕方がない。まあノモルシー可愛いからいいや。可愛いのは正義、なのだ。

ちなみに今日の晩ご飯はミリアさんちからもってきた、パンやらお総菜やらであった。

「じゃあ、灯りを消すわよ」

寝る準備も整い、私はノモルシーにそう言って、ランプの光量を最小にする。

目下のところ照明設備は手元にあるランプだけである。もちろんおじいちゃん製で無駄に凝っている。

こちらも明日のお買い物対象だ。

「おやすみなさい、ノモルシー」

「……おやすみなさい」

もぞもぞ。

しばらくして、なにやらお隣にうごきがある。

こちらに近づいてきたらしい。

「どうしたの、ノモルシー、眠れない？」

「寝るときはくつついたほうが幸せである。そう、お爺様に聞いた」

「まあ確かに、人の体温って安心できるけど……」

つまりくつついて寝たい、ということであろう。

「アヤカねえ様いい？」

「もう……好きにきなさい」

まあ、『妹』のお願いに『姉』がなにか言えるはずもなく。
結局、ノモルシーが私に抱きついてくる形で寝るのだった。
ちよっとうっとうしいけどわかったことが一つ。
うん、ノモルシー、いい匂いだわ。

そして次の日。私たちはみんなそろって街の役所に来ていた。

この《カリオリ》の街は都から指名された代官によって統治されるところで、今の代官さんは結構評判のいい人なんだそうだ。

もちろん、私達の目的はその代官さんに会う、なんていうことではない。

普通のRPGなら、新しい街にきたら町長さんやら村長さんやらに挨拶するのが普通なんだけどなあ。

「しかし、本当にミリアさんには助けられてばかりじゃな。紹介状までいただけるとは。ほんとうにお礼をしてもしたりないくらいだの」

いくらただ単に住民登録をするといっても、いきなり「異世界からきましたーよろしくー」では、さすがファンタジーなこの世界といえども通用しない。まあ普通なら間違いなく不審者扱いだよな。

それを避けるべく、おじいちゃんはミストさんに役所への紹介状、というか身元保証というか、まあそんなのをもらってきていたのだ。ただ、最悪紹介状とか無くても、おじいちゃんなら『そでのした』ってやつでなんとかしてしまおうだろうけど。

まあ、王道がいいよね。王道が。

「お礼だなんて……。でも、もしよろしければヨシツグさんに食事にでも連れて行っていただければ、とは思いますが」

「それくらいでしたらお安い御用ですな。どこかのタイミングでその場を設けましょう」

「ほんとうですか!!」

ぱあっ、とミリアさんが花の咲いたようなとはまさにこんな感じ、といった表情になる。

「もちろんですとも。お父上、ミスト殿のスケジュールを聞いておいていただけるとありがたいですな」

あ、時間のたった朝顔みたいな顔になっちゃった。

まあつまり、おじいちゃんはミリアさんとミストさんを接待しますー、という意思表示をただけなのだ。

おおかたミリアさんは二人で食事でも……。といった感じだったんだろうけど。

「ふむ、しかしこの世界では交際費の取り扱いは税務上どうなってるのか……。あとで調べてみるか……」

そして、おじいちゃんの興味はいつの間にか別のところに移っていた。当然、ミリアさんの落ち込みに気づくはずもなく。

しかしおじいちゃん、こういうところには異常に鈍感なんだよなあ。

日本でも墓場からゆりかごまでといっても過言ではないほどのいろんな年齢層の女性から大人気だったけど、ぜんぜん浮いた話でてこなかっただけはある。

それからしばらく色々な窓口をうろちよろして。

「はい、この書類を窓口に出していただければ、これで一通り終わりですね」

ミリアさんのおかげで役所での手続きもスムーズに終わりを迎えた。

一つ気になったのがおじいちゃんの職業欄。なにを思ったのか「自営業」と書いていた。

いったいなにをするのだろうか。というか今は無職でしょ、おじいちゃん。

そして役場を後にした私たち。

その次に向かったのはいわゆる《魔法ギルド》。

《トウモマーク》全土に広がる組織体で、会費によって運営がまかなわれている完全な任意加入団体なんだそう。

つまり入る入らないのは自由。そしてそこそが《魔法ギルド》のモットーらしい。

「魔法関係の話題やら論文でしたら、この会報が一番早いですわ。あと『ギルドカード』が発行されていていろいろな特典がありますの。ただ年会費は結構とられちゃいますけど」

年会費しめて、1万セナール＝1万ドル也。ちなみに複数年で割引や免除規定はあるそう。

それでもなあ、世界一高いといわれる日本の弁護士会費よりまだ高いよ、ここ。

「うむ、どうしたものかのお」

「まあ今日はみるだけにして、また後日考えてもいいと思いますよ」

ちなみにミリアさんは当然このギルドに所属しているそうだ。

ミリアさんがおじいちゃんと私に『ギルドカード』を見せてくれた。

なんかキャッシュカードみたい。で裏側をみるとなにやら気になることが書いてある。

日本語に直せば、「魔力・S」。

そういった魔法に関するステータス項目がちらちらと書いてあるのだ。

私が怪訝な表情を浮かべたのに気づいたのか、ミリアさんが補足してくれる。

「ギルドに登録する際、いろいろと調べることがあって、その結果がカード裏側に記入されるのよ」

「なるほど、RPGにおけるステータス、といったところですね」

「えーと『RPG』なにを指すのかわからないけど……。まあ個人の魔法に関する資質について、一定の指標となるわね」

ちなみに、当然「体力」とか「力」といった魔法には関係のない項目はついていないし、これらはあくまで目安としてのものであるから絶対視されるものではないとのこと。まあそりゃそうだよな。

「しかし絶対視されないもののそこに現われるものが、重要な要素であることには代わりはないのでしょうか」

「ヨシツグさんのおっしゃるとおりですわ。たとえば学校で魔力の適正とかを判断するのに使ったりもしますね。なのでこの街にある学校、ええと私も通っているのですが、そこに通うためには登録は必須ですね」

それを聞いたおじいちゃんが私に目配せする。私に入っておけというこらしい。

私もこっちの世界の学校には興味があるから願ったりかなかったりだ。

「それじゃあ私、『ギルド』に登録する！」

学校に通うために必要なら、早くとっておくに越したことはないよね。

「まあ、アヤが入るならワシはいいか。二人分の会費を払うのはもつたないしのう」

おじいちゃんがそういつて笑う。

おじいちゃんのケチー。まあそれは表向きの理由。そもそもおじいちゃんはいった組織に所属するのが好きではない。だからおじいちゃんが入らないのはそんなところに理由があるのだろう。

あと、おじいちゃん。ノモルシーが仲間になりたそうな目で私を見てるんだけどどうすればいいのだろうか。

そんな感じで私は軽い気持ちでギルドに登録することになったのだけど……

「なんじゃこりゃー」

私の前には山ほどの書類とテスト・検査が待ちかまえていて……。つい、もう私の世代では通用しなさそうな、某刑事さんが吐くような台詞を叫んでしまうのだった。

第7話 おじいちゃん、悪癖を出す

「アヤカねえ様……。ふぁいと」

「アヤちゃんー、リラックスですよりリラックス」

「ほっほっほっ」

そんな三者三様の応援を背にする私の前にそびえ立つのは一体の魔導機械。その容貌は全身鎧、つまりはオートメイルそのものであるが、フルフェイスの兜の下からその表情を伺いすることはできない。ずんぐりとした体型のそれは今にも私に襲いかかってきそうな雰囲気漂わせている。

まあ、例えるなら、ドラゴンなクエストのようなゲームにでてくるキラーマシ○といったところか。

「あのー。やっぱりこの試験やらないといけないのでしょうか……」

今さっきまでは、なにやらよくわからない検査や、性格診断みたいなものを書かせるテストだったというのにいきなりサバイバルな匂いがぷんぷんするテストに様変わりである。

「ご質問のとおりだ、アヤカさん。この試験は受けないことも可能である。すべての魔法使いが戦いに身を置くわけではないのだから」
「はあ……」

「特に君は見たところこの街にある魔法学校に通うためにこの試験を受けているのだろう？まあ、仮に受けたとしても私が危ないと思つた時点で止めるので安心してもらいたい」

髭モジャで恰幅のよい、浅黒の男性が私に注意を促す。

この人は今回私が受けるテスト全般の監督官を努めてもらつてい

るシケットさんだ。

試験の休憩中に少し話しただけでもすごくよい人とわかるし、また頭も切れる、そんな青年だ。

しかし一番の驚きは、この人まだ二〇代らしく、風貌からの推測された年齢と一周り違うということ。万国吃驚ショーといったところか。

まあ、それはおいておくとして、私の答えは決まっている。

「うん、無理。パスー」

「それがいいだろう。じゃあ次の……」

「ふむ、その試験、よければ代わりにワシがやってみてもよいか？」

いきなりそんな突飛な言い出す声の一つ。もちろん、そんな物好きはこの場には一人しかない。

ネクタイをはずした黒いスーツ姿の壮年の男性、つまりは私のおじいちゃんだ。

「……おじいちゃん。この検査、私が受けてるんだから邪魔しないでよ」

「うむ。検査としてアヤはこれをパスした、ということでもいいではないか。それとは別にな、ちょっと試したくなつてのう」

始まった。おじいちゃんの「試し癖」が。

ちなみにおじいちゃん「試し癖」の典型的な例である『感謝の正拳突き』は今朝も行われ、むき出しとなった上半身にミリアさんの素敵な視線を向けていた、というのは蛇足であろう。

「いやー、さすがに保護者の方の要望といってもなあ。規則では無理……」

「まあまあシケットさん。ところでこの機械。どれくらいの強さなんじゃ？」

話をはぐらかし、質問にすり替える。

「まあ、設定にもよるが、ベテランの冒険者が手こずる程度といったところだと思うが……」

「それはすごいの」

「いや、それほどでもないさ。あくまで『手こずる』程度。ただ数が揃えばあるていどの魔物からはこの街を守る、そういう自負は持っている」

「なるほどのう」

シケットさんはこの街の自警団にも所属しているらしい。

この《トウモマーク》はぼちぼち平和な世界だ。

昔は戦争やら魔王と勇者がいたりしたらしいけども、今はそんなことはない。

でもその名残か、いわゆる『魔物』は未だに存在し、人間やエルフなどの脅威になることもあるんだそうだ。

「そりゃ、俺が精魂込めて作成した”子供”のようなものだからな。まあだからこの試験も受ける受けないを任意で決めることができるわけなんだが」

「つまりこの街独自の取り組みというわけか」
「そうだ」

私はミリアさんの側によって、尋ねる。

「ねえねえミリアさん、実はあれって結構高価な道具アイテムなの？」

「うーん、値段でいえばそうなりますね。あの魔導具、つまりはマ

ジックアイテムのことですけど、あれはもともと卵の形で、術者の魔力によって起動します。そして強さや性質はその人の力量に左右されるのです」

「へー」

たしかにこの部屋（というかもはや小学校のグラウンドほどの広さがある広場なんだけど）の片隅のバッグには、その卵とおぼしきものが後生大事につめこまれていた。

「まあそれを使う人は特殊な技術と適正が必要なんですけど……。シケットさんはその術者のようですね」

確かにこのシケットさん。私がこっちで魔力に目覚めてすぐにミリアさんに教えてもらった「感知魔法」によると、なかなかの人物らしい。

らしい、というのはこの魔法ではあまりにもよくわからないからである。シケットさんの能力値が私の脳裏にAだのAーだのといったある程度サマリーされたものに変換され浮かんでくるだけであるから。

それでも大変便利なことにはかわりはないけど。

「なるほど。独自の試験であれば尚更、ワシが受けてもいいんじゃないか」

「いやいやいや。だからそれとこれとは話が違う……」

「ふむ、ではこういうのはどうじゃ」

こそこそと耳打ちをする。

おじいちゃんの口が動いた、シケットさんの顔色が青くなった、赤くなったりしておもしろい。

「ーわかりました。よろこんで協力しましょう」

秘密の会話が終わったとき、シケットさんはなぜか協力的になっていた。

「……またなにか弱みを握って脅したりしたのかしら、おじいちゃんは」

私のつぶやきは部屋の空気をちよつと揺らしただけで消えたていく。

そして五分後。

広場に動く影がある。

100体の魔導ロボットと1人のおじいちゃん。

つまりは100…1。

それが彼我をとりまく戦力差だった。

「さて、いつでもよいぞ」

おじいちゃんはいつものとおり、無謬。

ポケットに片手をつっこみ、散歩にでも出るかのような気楽な雰囲気醸している。

そしてシケットさんの方はといえば、対照的。私達の近くに立ち、すこし緊張した面もちで唇を動かす。

「……では。はじめ」

それが狼煙であった。

次の瞬間、一〇〇体のロボットの目から一斉に光線が放たれるッ。おおっ、なんだか外道っぽい感じの攻撃方法だ。

「きゃあっ」

ミリアさんが可愛い悲鳴をあげながらも私とノモルシーを守る障壁を張ってくれたおかげもあり、衝撃波を感じることもないが、先ほどまでおじいちゃんがいた場所は木っ端みじんに……。

なっちはいなかった。

「ーふむ、こんなのをくらったらイージス艦でも沈んでしまいそうじゃのう」

おじいちゃんが広げる両手の間に大きな光の玉がフヨフヨと浮かんで……。次の瞬間には光の粒子になって消えていく。

「しかし、逆をいえば食らわなければどうというわけでもなし」

続いて魔導ロボの一部がおじいちゃんに向かい突貫。

彼らの手には鋭い刃をもつ剣が握られていた。

そしてすぐに彼らはおじいちゃんを取り囲むように二重三重に配置され、残りは、光線の射線を確保するためか、位置を変更している。

「ヨシツグさん、囲まれてしまいますわっ!!」

ミリアさんの注意が届く前に、魔導ロボは包囲網を完成させる。

そして彼らは一斉に剣を――。

すかつ、そんな効果音がつきそうな具合に、彼らの刃を空を切っていた。そんなことが数度続く。

ただ、おじいちゃんはロボット達の間を悠然と歩いているだけと

いうのに。

「ねえアヤちゃん……」

「なんです、ミリアさん？」

「なんでロボットはヨシツグさんの『いないところを狙って』攻撃してるのかしらね？」

そうなのだ。ちなみにおじいちゃんは歩いているだけのようになんか私達には見えている。その周りをいないところを狙って剣を振っているように見える。端から見ればこいつらふざけてるのかといった感じだろう。

「……床詠流歩行術」

それまで黙っていたノモルシーが答える。

あー、アレがわかるのか彼女には。

私もおじいちゃんの動きをちゃんと追えはしないのだけど何をやってるのかは大方想像がつく。

「ノモルシーちゃん、なんですのそれは？」

「あー、ミリアさん、私が説明しますよ」

たとえば野球でバッターがバットを振るときのことを考えてみよう。投げられたボールの位置を見極め、ここにくるといった予測をもとにバットを振るう。

当たってればボールはバットにあたりホームラン。

でもちよつと違えばかすってファウル。

大きく違えば、空振りの三振、となる。

そしていまおじいちゃんがやっていることはそれと同じ。独特の歩法をもって、相手の攻撃のタイミングずらし、ごまかす。彼らが

いると思って攻撃したところにおじいちゃんはいない。

「ちなみに床詠流とかいってますけど、あんな変態チックなことができるのおじいちゃんだけですから。そこだけはお忘れなく!」

付け加えるなら日本にいたときは、あんな大層なものではなかったと思うんだけど。

「ははは、ありがとうアヤちゃん。なるほどヨシツグ様は文武両道であるということが再確認できましたわ、これならぶつぶつ……」

「――お爺様が囲んだ相手をすべて片づけた」

ノモルシーにそう言われて、おじいちゃんのほうを見れば、おじいちゃんを襲ったロボ達の動きがなにかおかしい。

「『感謝の正拳突き』の修行が役にたったワイ」

少しだけ口の端をあげるおじいちゃんの言葉と同じくらいのタイミングであつたろうか。

ばらばらばらばらばら。

今までロボットだったものはスクラップの山へと姿を変えていく。

「そんな……」

シケットさんが唇を青くしながらつぶやく。

ごめんなさい、シケットさん。ちゃんと弁償はしますから……。

その光景に怯むことなく、残ったロボ達がまた一斉に光線を浴び

せかけてくる。右から左から、斜めから。

しかし、それはもう時間を稼ぐことにしかならず。

「魔導ロボ一〇〇体。これなら都の精鋭騎士団一個大隊でも退けることができるほどなのに……」

ポケットに片手をつつこんだままこちらに戻ってくるおじいちゃん
の背後にもう立つものはいない。

時間にして五分もかかってない。つまり準備している時間のほうが長かったのだ。

しかし私はそんなことより気になることが一つある。

ねえ、おじいちゃん。ポケットに手を入れたまま歩いたらダメって昔から私、注意してたよね？

第8話 おじいちゃん、目標を明確にする

台形の形をした大理石が私の頭上数十センチのところに備え付けられている。

その底面には無数の穴があって、そこから心地よさを感じる程度のお湯が噴出していた。

つまりこれは日本でいうところのシャワーというやつである。

「はー、でもホント、この《トゥモマーク》にシャワーがあるとは思わなかったわー。お風呂もあったし。魔法超便利ー」

「ノモルシーもずっと寝てたから……。新鮮」

そんなわけで我々姉妹は自宅に帰ってくるなり疲れを癒すため、シャワールームに駆け込んだ。

「それにしてもなんか今日も疲れたわ……」

「アヤカねえ様ががんばった、えらい」

「まあでもおかげで判定結果もちゃんと出たし結果オーライというやつかしら。おじいちゃんの無茶さえなければ、ねえ」

結局、私の判定は次のような感じだった。

【魔力…A】

⇒個人が持っている固有の魔力量のこと。

【制御…S＋（プラス）】

⇒魔力を制御する力で、これが高いほど効率よく魔法を行使でき
きる

【適正…A＋】

⇒魔術の種類への適正。高いほど使える魔術の幅が広がる。

【耐久…B】

⇒魔法を行使し続ける力、要するにスタミナのこと。

【瞬発力…A】

⇒魔力を行使するまでの時間および行使し初めて最大限効果を発揮するまでの時間の長短。

それぞれの項目の説明はシケットさんによるもので、彼が言うには「C」が平均。そしてランク自体は「S」から「E」までである。つまり私の成績はかなり優秀なのだ。学校に通うなら奨学金云々とかがあるらしい。

ちなみに、ミリアさんはオールA＋以上。さすがはエルフさん。でもミリアさんに負けて私はちょっぴり悔しかったり。

しかしこの指標は、訓練はもちろん、体調やらなんやらで結構上下するらしく、あくまで『目安』に過ぎない――。おじいちゃんにこのカードを見せたとき、特にそれを注意されたのだ。

「『数値として見えたものを人は信じがちじゃ。しかし本質は指標化できないところにある』か」

おじいちゃんに言われたことをぼんやりと考えながら、シャワーからあがった私はノモルシーの髪をわしゃわしゃとタオルで拭く。金髪がふわふわしてて、水滴が魔法灯に照らされつややかな光を放っている。

いやー、私一人っ子なので妹なんて少し憧れがあって、こういったシチュエーションはちょっとした喜びなのだ。

「……ねえ様痛い」

「あ、ごめんごめん力入れすぎたみたいね」

少し力をいれすぎたようだ。白い肌に落ちる照明がノモルシーのすらりとしたボディラインを艶かしく映し出す。

「でもねえ、ノモルシー」

「……？」

「その格好はどうなんだろうね？」

「……ふかふか、あったかくて素敵だよ？」

彼女はおじいちゃんのYシャツのみを羽織った姿で首をかしげる。普通の寝巻きも今日帰りに買ったのだけど……。どうしてもノモルシーが譲らず、結局はおじいちゃんも苦笑して折れた。

私たちが部屋に戻ると入り口のドアにメモが残されていた。それには一言、『部屋に來なさい』とだけあった。

「アヤ、夜分に済まないな。まあ座るといい」

席を薦められ、私とノモルシーはおじいちゃんの部屋にいつの間にか用意されていたソファアに座る。目の前のテーブルには飲み物があって、おじいちゃんは立ったままだ。

そういえば、と私は今日の昼間のことを聞いてみることにした。

「おじいちゃん、なんであんなことしたの」

「あんなとはどんなじゃ」

「あのヘンテコなロボットと戦ったことよ。高そうなものを壊して……。弁償とかどうするの？」

「まず一つ誤解がある。あれは壊してはいないぞ。あれはあの後また『卵』に戻るだけじゃ。しばらく回復までに時間がかかるがの。いやなに、こちらの『標準的』な強さというものを体感しておきたかったのじゃ。さすがに日本の標準とは比べものにならないな」

「もう……」

「それに試したい魔法もあったんじゃ。ミリアさんに教えてもらったやつがの」

あれ、魔法なんて使ってなかったように思うけどなあ。ただ、景気よくぶっ飛ばしてただけだったような。そんな私の隣ではノモルシーがコクコクとオレンジジュースを美味しいそうに飲んでいた。

「まあ、その話はおいおいしようかの」

ちなみに魔法の拾得にはいくつかの方法があるんだけど、一番てっとり早い方法は、魔力をめざめさせたいつぞやのように、おでことおでこをくっつけて魔術プログラムを移すこと、なんか《インプリンティング》っていう手法なんだそうだ。

ただ、これをしたところで、その魔法が行使できるのは、しっかりと魔術プログラムを理解することが大前提。

ちなみにミリアさんは「では、私は今日は家にもどりますから」と言って帰っていった。それも結構身軽な格好で。つまり荷物はまだこちらの家に残ったままだ。

「さて、アヤ本題に戻そう」

「うん。でどうしたのこんな時間に呼び出して」

既に時間は日をまたいでいる。

「元の世界に帰る方法、それについて話すためじゃ」

「ねえ、おじいちゃん……」

「なんじゃ？」

「なんでそんな大事な話をもう日が変わろうとする時間にするのよっ！ー！」

噛みつく私をなんでもないようにあしらいながら、こっそりとおかわりを要求するノモルシーのコップにオレンジジュースを足す。

「では、アヤ。ワシらはどうやってこの《トウモマーク》の世界にやってきたんだろうか」

どこから調達したのか、ホワイトボードになにやら色々と書き込みながら、私に聞いてくる。一方ノモルシーはむはむとクツキーをほおばっていた。

「はい、おじいちゃん先生。落ちてた箱を拾ってそれを開けると、次に気づいたときはこの世界でした」

《師父》の講義が始まる。ちなみにこのあだ名、おじいちゃんが現役だったころのものらしい。

「そのとおり。その『箱』によって我等はこの世界に誘われたのだ」

そういっておじいちゃんが出したのは一つの箱。

まさしくそれは私たちをこの世界に吸い寄せた小箱。

「おじいちゃんそれって私達が……」

「さて、ノモルシー。少し良いかの？」

「はい、お爺様」

そういうとノモルシーが立ち上がり部屋の真ん中へ。そして。

「箱が光りはじめた……？」

そしてまた、部屋に真ん中に立つ少女も同じように。

彼女、ノモルシーは箱と一緒にぼんやりと薄群青色の光を放ちながら、ペコリ、とお辞儀した。

「……ではあらためて。アヤカねえ様、私は『ドル・ドナの箱』管制精霊ノモルシー。今後ともよろしく」

「うん、よろしくー。でもびっくりしちゃった、ノモルシーがこの箱の精霊さんだっただなんて」

「本来この『ドル・ドナの箱』は膨大な魔力を蓄え、種々の魔法行使を補助するためのマジックアイテムじゃった。そしてノモルシーの役目はこの箱を使う者のサポート、というわけだ」

「でもノモルシーを使える人は今までいなかった」

少し寂しげに眉を寄せ、少女は呟く。

「マジックアイテムには使い手を選ぶものも珍しくはない。これは作った人間にも扱えないものだったというわけじゃ。だから長いこと封印されておった」

「つまり、『ロトの剣はロトの血を引く者でないと扱えない』というわけか……」

「まあ、そんなもんじゃろう」

「……………?」

あ、ノモルシーにはわかんないか、この例えは。

おじいちゃんの説明は続く。つまりこの『ドル・ドナの箱』は長い間封印され、ミリアさんの家に眠っていた。でも盗まれたときになんらかの理由で封印が解かれ、結果としてここにいる、と。

「でも封印が解けたなら普通に考えて、この『ドル・ドナの箱』を使えば帰れるんじゃないの。ノモルシーがいれば使い方もわかるし」
「確かにそうじゃ。ただし、現在この箱は大規模転移魔法を発動したおかげで魔力は空っぽじゃ。その上この転移魔法はこの箱が独自に持つ規格、というか機能によってのみ成立可能なもののようにじゃ

な」

「……………魔力が空になった、つまりその箱が使えない、と。じゃあ私達は『日本』に帰れないの？」

「時間が立てば『ドル・ドナの箱』は周囲から魔力を徐々に蓄積できる。お爺様達をこちらに導いた転移魔法もつかえるようになるハズ」

ノモルシーの補足について私は心が浮き足立つ。

「え、それじゃあしばらく待てば私達は元の世界に帰れるの!？」

「まあざっと300年くらい待てば、じゃがの」

あれ、私5回くらいおばあちゃんにならないといけないってことだろうか。それはとても無理な相談だ。

「だからノモルシーは提案する。『ドル・ドナの箱』に魔力を充当すること」

金髪の少女の宣言、それは私達が当面の目標を認識した瞬間であった。

第9話 おじいちゃん、街になじむ

「よう、アヤカちゃんじゃないかい。今日は良い魚が入ったんだよ、どうだいっ？」

魚屋さんの前を通りかかった私に声がかかる。見ればここ数日ですっかり魚屋のおばちゃんの精悍な笑顔があった。

既に《トウモマーク》に来て2週間くらいが経過している。

折角声をかけてもらったので、私は改めてお勧めされたものを見る。扁平型の大きめなそれは赤みがかっていて、まるで鯛のようなお魚さんだ。その目は澄んでいて黒く、新鮮でお刺身にでも出来そうな具合だ。

「うーん、確かに最近肉料理が多かったような気がするから……。どうでしょう、ミリアさん？」

「ええ、そうね……。そうだ、今日は以前アヤちゃんに教えてもらった『塩釜』でもやってみるというのはどうかしら」

「お、いいですね」

「ノモルシーは肉が……」

「あなたが今手にもっているそれはお肉がいっぱい入ってるでしょう。それに昨晚だってお肉食べたし、栄養はバランスよくとらないとね」

彼女、私の妹であるノモルシーの両手にはそれぞれ《肉まん》らしきものが握られている。これはノモルシーの上目遣い攻撃による成果物。だって、ワインレッドの瞳を潤ませながら、『ねえ様コレほしい……』なんて言われて買わない姉はいないと思う。

つまり、私の妹はこんな可愛いわけがないわけがないのだ。うん、よくわからん表現だわこれ。

「デザートは別腹なの……」

「いや、肉まんはデザートじゃないから。たぶん」

そんな私達の様子を魚屋のおばちゃんがおもしろそうに眺めていることに気づいた。うわ、このやりとり、なんか恥ずかしい。

今は夕飯の材料の買い物にでている最中だ。もちろん今私達が住んでいる《カリオリ》の街で、である。

『ドル・ドナの箱』に魔力を供給し元の世界に帰還する――。

私達がなすべきことは決まった。でもそれは、登るべき山は見つかったが、その頂上への道は発見すら出来ていないといった状態で正直五里霧中。

しかし、それを今気に病んでも仕方ないし、私たちがやらないといけないことは山積している。

そして、おじいちゃんは何んらかの手掛かりを掴もうとしているのか、最近はやな夜な出かけては一杯引っ掛けて帰ってきている。

一方、私は私でなんか色々雑事に追われ、忙しい時間をすごしている。

それにしても……、この人、エルフのミリアさんの胸部についているでっかい二つのお碗型のものを見て、私は一つため息をこぼす。

「でもミリアさん、今日は気合が入ってますね」

「私が正式に引っ越ししたお祝いですからっ！」

腕を組んで宣言するミリアさん。この人はいわゆる魔法版マッドサイエンティストさんである。見た目も中身も上品なお嬢様なんだけど、それを色々と台無しにしている感がある。

今のミリアさんの研究対象は私のおじいちゃん、床詠ヨシツグだ。

彼女の知的探究心というものは、様々な困難——具体的には彼女の両親の反対——を打ち破るものだったらしく、昨日正式にミリアさんは今や我が家の同居人というポジションにクラスチェンジした。しかし実は我が家も助かってたりする。ミリアさんの下宿代が親御さんから振り込まれるからだ。不労所得さまさま、というわけ。まさかミリアさんがそこまで考えてくれたのかもしれないが……。

「今日から正式にヨシツグ様と一つの屋根の下……。いつ何時、間違いがおこつても良いように準備をしとかないといけませんね。うふふふ……」

とまあこんな呟きは聞こえなかったことにしとけば万事上手いくのだろうな、たぶん。

なんやかんやで食材を買い込んだ私達は一路家に戻る。

家の敷地内に入れば、そこかしこに建築資材が置かれていて、まさにザ・工事現場状態である。

なにせちよつと前におじいちゃんが『建て直し』はしたものの、あくまでも体裁を整えたくらいで、建築物としてはまだまだな我が家なのだ。

数日前から地元の建築業者さんをお願いして、家の内装やらなんやらを請け負ってもらっている。

そもそもそれもおじいちゃんなり誰かの魔法でやればいいんじゃないかな、などと思つたものだが、「プロに任せれるものはちゃんと対価を払って任せるべきじゃ」とはおじいちゃんのコメント。確かに全て魔法任せじゃ駄目だね。

ただ、おじいちゃんの真意は別にあつて、私達積極的に街になじむための一環らしい。そのために工事する人達と飲みにいたりもしてるみたいだ。

ただ、おじいちゃんは数箇所から見積もりをとって結構コスト的に叩いたらしい。

恨まれなければいいんだけど……、などと最初は思っていたのだ、でも。

「ようお嬢!! 今、おかえりかい!」

野太い声が私達の帰宅を出迎える。声をしたほうを仰ぎ見れば、家の周りに組まれた建築用足場の二階部分から顔を出す人の影が見える。この工事の現場責任者のヤザックルさんだ。

「ただいまです、ヤザックルさん。ところで、少し前にも言いましてけど『お嬢』はちよつと遠慮したいのですが……」

「いやあ、ヨシのオジキの孫娘さんだから、そう呼ぶのが普通だろう」

「いえ、普通じゃないですから、それ」

ヤザックルさんは足場からぴょんとジャンプすると、地面に綺麗に着地する。

その姿は矮躯にして屈強。年のころは40台前後のいかつい男性。そして顎鬚は胸のあたりまでである。

いわゆる《ドワーフ》と呼ばれる方々の一人で、『ヤザックル組』の棟梁さんだ。

「細かいことを気にするたあ、オジキの娘っ子には見えねえなあ。そうだ、ちようどいい、オジキに伝えておいてくれ、今日の工事はここまです、ってな」

「わかりました」

「よっしゃ、野郎どもッ!! 撤収だ」

「「へいっ!!」」

どこに潜んでいたのか、作業員の皆さんは元気よく応えるなりて

きぱきと後片付けをし、整然と撤退していく。その間3分ほど。ほんとうに風のように去っていった。

そしてあのヤザックルさん、最初の日の晩におじいちゃんと一緒に飲みにいった色々意気投合したらしく、それから『オジキ』と呼んでるのだ。おじいちゃんは気にしてないみたいだけど、私は『お嬢』といわれるのは勘弁願いたい。どこの組のものですかそれ、って感じだし。

彼らが去ったあとの工事現場を眺めながら、ミリアさんが何事か思い出したかのように言う。

「そういえばヤザックルさん以前『カチコミとかの時は一声かけておくんなせい』とかヨシツグさんに言っていましたけどあれいったいどういう意味なんでしょうね？」

「……さあ、ミリアさんにわからないのなら、私にわかるわけじゃないですか」

いや、カチコミとか物騒な単語、か弱い私が知るわけないのです。知るわけが。

そして夕飯。これは4人で一緒に食べるのが基本である。

結論からいうと、ミリアさんが作ったお魚の塩釜は美味しかった。料理までできるなんて完璧な人なんだろうか。

野戦料理やらサバイバルな感じのやつなら、私もおじいちゃん仕込みの業で負けはしないと思うのだけど。

そんなわけで私も『普通の』料理は色々ミリアさんのもとで絶賛修行中である。

私がお魚をつついてる間にミリアさんがおじいちゃんに尋ねる。

「で、明日はアヤちゃんの表彰の日ですけど、私が出ててもよろしいのですか？」

「いえ、むしろミリアさんのフォローが必要なのです。是非ついて

きてもらいたいのですが……。どうですか」

この街に来て今日までにあった大きな出来事といえば、少し前にこの《カリオリ》の街が魔物の大群に襲われたことぐらいだろうか。結果としてそれは私のおじいちゃんによって防がれ、ことなきを得た。

もっとも、公式記録では私の通報を受けた、シケットさんとミアさん達エルフ族の協力で退けた、ということになっているのだ。

なので、なぜか私が『勇気ある一市民』として表彰されることになり、その式が明日あるというわけだ。もっとも式といっても感謝状一枚渡される簡単なものらしい。わーい、うれしーな！

「でもヨシツグさん、どうしてあの日のことの真実をみなさんに伝えないのですか」

ミアさんの言うことはもっともだった。別におじいちゃんが魔物を倒しましたー、で万事解決なのに。それをわざわざこの人はややこしくしてくれてるのだ。

「ふむ、確かにおっしゃるとおりです。力を隠すつもりはあまりないのですが、かといって知らしめるのもどうかと思ひましてな。いきなり余所者が規格外の力を振るうのは畏怖の対象になりかねません」

「なるほどー、そうですわねー、ヨシツグさんは本当に素敵な方ですからあまり他の人に知られては困りますし……」

ミアさんが納得した様子でうなづく。なんか納得の仕方が違わないかな、それ。

それにしても、この出来事をぼかすにしろ、なんかもう少し別のストーリーがあったんじゃないのかと私は思うのだが。

ちなみにシケットさんもこの件では共犯者である。というか彼は最近よくウチに来てはおじいちゃんとなにやらごそごそやっているのだ。時にはミリアさんまで交じって夜遅くまで。

そして、私はいえはこの表彰状を貰えばミリアさんが通う魔法学校に学費免除で入れると聞いて折れたのだ。

まあいくらメリットがあるとはいえ、ホント明日は憂鬱だわ。

次の日。

住民登録をしにきて以来の訪問となった市庁舎の講堂っぽいところに私達一行は通されていた。

もうすぐ、この街のトップがここにやってきて、表彰状をくれるらしい。はあ、はやくおうちかえりたい。

そんな私の希望をかなえるかのように、ぎぎい、とドアの開く重たい音が部屋に響き、一人の男性がしっかりと歩調で私の前に立つ。

「わたしが、町長です」

そんな第一声を上げる人物は、うちのおじいちゃんよりずっとおじいちゃんな人物だった。

第10話 おじいちゃん、もっとおじいちゃんに会う

「わたしが、町長です」

某なんとかサガ3のような台詞で現れた、《カリオリ》の街の代官さん。

代官さんは白くなった顎鬚を長く垂らし、頭頂部に残った髪をまとめて後ろにたらしっていて、背はそんなに高くなく、ひよろつとした体格の人物だった。

式自体はつつがなく進み、私は表彰状をその人からもらって、5分もたたずに閉式。

さて帰ろうかとおじいちゃん達に合流すると、近づいてくる人がいる。先ほどの町長さんだった。

「今日はお忙しいところ参列していただきありがとうございました、改めて自己紹介しましょう、シマベナウ・ベルストアですじゃ」
「はじめまして、私はアヤカ・トコヨミと申します」

そういつて私はスカートの裾を掴んで一礼。今日の私は少しだけフォーマルな格好だ。

ほっほっほっ、と低く晒うこの御仁はこの《カリオリ》の街に国から派遣されている代官さんだ。派遣といってもこのおじいちゃんは、望んでこの街にいるらしいということをミリアさんに聞いた。

「うむ、受け答えもしっかりしておっているのう。うちの孫たちにも見習わせたいの」

そう言いながらシマベナウさんは視線を私の後ろに向ける。視線の先にいるのはうちのおじいちゃん。

「いやはや、ともかくこの街の危機を救っていただき、街を預かるものとしてお礼を言わせてもらいますぞい」

私に声をかけながらも注意は完全におじいちゃんにいつていた。そして、それ以外のものも。

気づかないフリをしながら、私は目の前の《ジジイ》をに笑顔を向ける。

いつの間にか隣にいたはずのノモルシーは私の後ろに隠れるような位置取りになっていた。ミリアさんはそんなノモルシーを不思議そうな目で見ていた。

なぜノモルシーが隠れるのか。

なぜならこのシマベナウ氏、現在進行形でものすごい気迫、というか魔力みたいなものをおじいちゃんにたたきつけているからだ。周りの人に全く気づかれることなく。それは魔法使いとしては高位にあるミリアさんが気づかないくらいピンポイントなもので。ノモルシーは精霊さんだから当然気づく。

私が気づいたのはたまたまだ。昔から気配とかには敏感なほうだし。おじいちゃんばといえどそれに全く動じることなく悠然と対応している。

そしてこれからわかること、この町長さん、只者ではありません。先日相対した魔物たちが首のすわってない赤子に見えるほどのプレッシャーに背中にかくをかいしてしまう。

というかこの人が戦えばよかったんじゃないだろうか。

「いやあ、齢100を超えるところ、なかなか身体が思うようにいきませんなあ」

「いやいや、町長殿はまだまだ壮健でいらっしゃいますよ。私はもうあちこちガタがきてましてなあ」

「ほほっ、謙遜されますな。ところで、お名前を伺ってもよろしい

か」

「申し遅れましたな。アヤカの祖父でヨシツグ・トコヨミと申します」

おじいちゃんが私との目の前に立ってにこやかに談笑する。社交辞令として形容できないような会話。でもおじいちゃんが間に入ってくれたことで町長さんからの圧力を直接感じることはなくなった。その様子になにか感じ取ったのか、シマベナウさんから出ていたのプレッシャーも消える。

「ほう、お孫さんは中々『感受性豊かな』ようすなあ」

「自慢の孫娘達ですからな」

「なるほど『達』ですか……」

シマベナウさんはノモルシーに柔和な目を向ける。

ビクツとノモルシーが震えるのを感じる。彼女は依然私にくつついたままだ。

まあ確かにノモルシーは私と似ても似つかないので『姉妹』というのは結構無理のある設定だ。彼はそれ以上そのことに触れず、急に話題を転じた。

「そうそう。ときにヨシツグ殿、なにか今晚予定とかありますかな？」

「……いや、特にはありませんが」

「どうですか？これは」

クイッとグラスを傾ける動作をする。

この辺のジェスチャーというのはどこの世界でもそんなに変わるものではないのか。

まあ、日本ではお猪口を傾ける所作といったところであろうか。

そしてこの種のお誘いをおじいちゃんが断るはずもなく。

「おおっ、喜んで参りましょう。まだまだこの街にも知己が少ないものですから、なかなかそんな機会がありませんでの」

しれっとそんなことを言うおじいちゃん。何日か前飲みについてたような気がするけどそれは私の気のせいかしら。

そしてシマベナウさんはおじいちゃんと一言二言言葉を交わすことからと笑いながら、講堂を後にした。残されたのは私たちのみで

「あの、おじいちゃん……」

「ああ、アヤそんなに心配しなくても大丈夫じゃ。まあ拳を交える事態にはなるまいて」

「いや、ちょっと飲みすぎは良くないっ、って言いたかったんだけど……」

「ほほっ、大丈夫じゃよ。そんなに飲まんから」

『拳を交える』なんてキーワードに、一人ミリアさんが首をかしげていた。

そんなおじいちゃんが酒宴から帰宅したのは大分も夜も更けた時間だったことを追記しておく。

□

私が表彰された二日後。我が家にはお客様がいらっしゃっていた。

「ふむ、そこはそうじゃないぞ。薄い左辺を攻めるのが常道ではな

いか？この局面では」

「いやここはこの一步を進めることが最善手じゃろうて」

真剣に言葉を戦わせているのは、おじいちゃんともっとおじいちゃんな二人組。彼らは今この《トウモマーク》における代表的なボードゲームに興じている。将棋みたいなルールのものらしいが詳しくは知らない。

今日は《トウモマーク》における安息日、つまりは日曜日だ。しかし私にとっては全然安息な曜日になっていない。急遽いらっしやったお客様をおもてなししないといけないからだ。

ミリアさんにも手伝ってもらってほしいものである。もう、予定を入れるなら数日前に言っただけのものである。

もつとも、知り合ったのが数日前なのだから仕方ないだろう、ななどおじいちゃんは言う。それならば日程を後ろにずらせばいいだけだと思う。

私達の家は3階建て、1階部分はテナントが入るような空きスペースだ。今はそこにテーブルと机をいくつか持ち込んで、喫茶店のような様相だ。もつともカウンターとかはないし、コーヒー豆を挽く直火式焙煎機などもあるはずもない。

ああ、美味しいコーヒーが飲みたい。

「はいはい、いい年した大人がゲームなんかで熱くならないでくださいな」

私は二人それぞれにお茶をだす。うちのおじいちゃんよりもおじいちゃんなこの方、シマベナウさんには最上級の茶葉を使った茶葉と、日本の知識を使って再現したお菓子を提供する。

『お客様をもてなす際はとことんまで』それが床詠家の家訓である。

まあ、といっても見た目はただの緑茶とおはぎに過ぎない。ちな

みにおはぎはミリアさん謹製だ。

そうやって出すものを出した私は、おじいちゃんたちが座って談笑しているところから離れ、目立たない場所に座る。

そこで魔法陣を展開して、読書としゃれこむ。ミリアさんは巻物を開いてなにやら難しそうな顔をしている。

しばらくそうやっているとおじいちゃん達の会話が耳に入ってきた。

「……そうは言うがなシマベナウ殿……」

「ふむ、ではヨシツグよ、どちらが最善か」

「どちらが正しいか」

そのとき、ふたりの瞳が同時にキラリと光った、ような気がした。

「互いの拳を交わらせようぞ!!」

……もうやだこの二人。

このふたり、《カリオリ》の街における武闘派おじいちゃんグループの筆頭に違いない。そんなグループあるかはわからないけど。先日飲み会から帰ってきたおじいちゃん、私がわかるくらい機嫌が良かったものなあ。珍しいのだ、そんなおじいちゃんは。

しかし、ほんとに脳筋な人達なんじゃなろうか、この老人共は。まあ、どちらも楽しんでやっているから、あまり目くじらをたてることもないんだけど。

そんな彼らを見ると、おじいちゃんと不意に目が合った。

「む、アヤも混じるかの？」

なんでそんな結論になるのだろうか、このお爺様は。

「全然・絶対・全く・徹底的に・金輪際混じったりしませんからッ
!!」

「むう、ヨシツグよお主の孫娘さんは案外融通がきかなあ」

「相違ない。アヤは最近死んだバアさんに似てしまってますな。私
としても扱いに困っているのですよ」

「ほう、そうなのか。そういえばうちの曾孫の子達がアヤカちゃん
と同じ位の歳で、今度な……」

二人は和気藹々とした様子で階段を登っていく。

「ミリアさん……防音と対衝撃、そして対魔法の結界、三階全部に
お願いできませんか？」

折角、ヤザックルさんに工事をお願いして綺麗にしてもらったの
に、壊されてはたまったものではない。

「ああ、それなら上にあがりながらヨシツグさんがかけていました
から大丈夫ですわ。ああ、本当ならお二人が試合うところを直接見
てみたいのですが、お邪魔になってしまいますわよね。本当残念
……」

ほう、とため息をつきながらそんなことを言うミリアさんの瞳は
テーブルの上におかれている水晶玉に釘付けである。

なにやら三階でのふたりの戦いを覗き見るらしい。でばがめす
るエルフさんというのも珍しいのかもしれない。

そんな彼女の様子を見ながら私はお皿を片づけつつ、彼女の肩越し
に画面を覗く。

——あ、おじいちゃんが4人に増えた。あ、シマウベアさんも——。

その様子だけ見て、私は片付けにもどる。ミリアさんが言うにはこんな使い手同士の戦いなんて滅多にみれるものじゃない、ということらしいが……。

ミリアさんにもう声をかけても無駄っぽいので、私はポケットから自分の杖を取り出して魔法をかける。

橙色の光が杖から一瞬きらめいて消える。念のため敷地の境界にも防音結界を敷いたのだ。ご近所さんから苦情がきても困るし。

それから2時間くらい経って、ふたりのおいちゃんが戻ってきた。

「いやー、いい汗かいたのう」

「ははは、シマベナウ殿のタフさにはかないませんな」

「これはまた謙遜しおって。さて、時間も時間なのでそろそろ行くぞい。世話になったな」

そう言って帰っていく町長さんを見送ると、おじいちゃんがこちらをくるりと振り向く。

「さて、わしは明日くらいからそろそろ仕事を探そうかと思っておる。なのでアヤカは明日から学校に通いなさい。ああ、手続きのことなら心配いらんよ。ちゃんとわしの方からお願ひしておいたから」
「まあ、そうですのか？ さすが明日から新学期ですから、ちょうどタイミングが良いですね」

ポン、とミリアさんが嬉しそうに手を打つ。

「……………へ？」

そんな私の間抜けな声はミリアさんの声にかき消された。
なにが『なので学校に通いなさい』なのだろうか。前後の文脈つ

ながってないよ、おじいちゃん？

第11話 おじいちゃん、校長先生に会う

さて、どうしたものか。姿見には私が眉を寄せ懊悩する姿が映っている。それもブラジャーとスカートのままで。

不意に鏡に映る姿が2つ増える。言うまでもなくミリアさんとノモルシーだ。彼女らは思い悩む私の姿をしげしげと眺めていた。

「うーん、やはり日本で来ていた学生服しかないか……」

現在、私は明日学校に来ていく服を選んでいる真っ最中である。いろいろ選んだものの結局はミリアさんのお古をいただくという話に落ち着いたのが先ほどのこと。

「さすがに昨日の今日ではうちの学園の制服も間に合いませんしね。私のお古でサイズが合えばよかったんですけど……」

腕を組むミリアさん。たゆん、と揺れ寄せられ盛り上がる二つの塊。

しかし残念ながらミリアさんの服、特にその一部分が合わなかったためミリアさんのお古を頂戴するという作戦は失敗に終わったのだ。

仕方なく、最初に選んだ服に着替えなおす。

「アヤカねえ様かわいい……」

「ありがと、ノモルシー」

フォローをいれてくれた我が妹をくしゃりと一撫で。鏡には典型的な日本の女学生が映っている。

しかし、なぜ旅行に私が学校の制服をもってきていたのか。それ

もまたおじいちゃんのせいである。

出発の際おじいちゃんから『今回はフォーマルな場に出るかもしれないから』と制服を用意させられていたのだ。学生におけるフォーマルな衣装といえば学生服が定番であるとはおじいちゃんの主張。ちなみにうちの学校は典型的なセーラー服であった。ちなみに先日の表彰式もこれで出席していたりする。

そんなとき、ノックをする音が聞こえた。

「うむ、いつも制服姿のアヤを見て思うが『孫にも衣装』といったところじゃな」

「む、そこは『馬子』でしょう、おじいちゃん。そもそもその発言自体失礼だと思うんだけど」

軽口に対する私の抗議にも全然動じた様子なく……のはずだが、今日は少し趣が違うようだ。

「ふむ、確かにな。そうだ。そのお詫びとはいってなんだが、少しプレゼントをやろうかの」

そうするとぱちん、と指を鳴らす。次の瞬間私を魔法の光が包みこみ、すぐに消えた。

「おじいちゃん、一応聞いておくけど……。何をしたの？」

「もちろんプレゼントじゃよ。すこしアヤの服を魔法的に強化しておいた。物騒なことはないが念のため、というやつじゃ」

確かに少し袖をめくってみれば、先ほどまでなかったはずの魔術文字がいつのまにか薄く現われている。うん、また私の知らない魔法だわこれ。

「えーと、ありがとう、おじいちゃん。でもあらかじめ言ってくれ

ると助かるなあ、なんて思ったり」

「ヨシツグ様……。その原理は？」

そういつてミリアさんがおじいちゃんに寄り添って質問攻めにする。その目は猛獣が獲物を狙うそれである。そんな彼女の様子に私は肩をすくめるだけだった。

そして次の日。

私達は少し早めに家を出て街の高台にある《カリオリ魔法学校》へ向かった。

今日からいわゆる新年度である。私が通うことになったこの学校は8年制であり、日本で言えば中学校〜短大くらいまでの年齢の子女が通う。

「ほんと、結構大きいのねー」

「そうですよ、この《カリオリ魔法学校》は大体1学年が100名程度の人数がいますからね。多分その4年生にアヤちゃんは編入されることになるはずよ」

「なるほどのお。そういえばアヤの入学式にワシが出るのは初めての経験じゃな」

「ノモルシーも初めて」

一口に『学校』といっても当然種類は色々ある。就学年数が違うところもあれば、ほぼ同じ就学年数である『魔法学校』でも、共学のところもあれば、男子校もあればある特定種族の人しか通えないものもある、とはミリアさんの説明だ。ちなみに彼女は6年生にあたる。

そんな話をしている間に学校の建屋が見えてくる。その外見はちよつとしたお城のようだ。

私たちがそのお城のような学園に到着すると、早速部屋の一室、応接室に通される。

そこにはちょこん、と座る小柄な眼鏡のお姉さんがいた。

彼女は立ち上がると 身体をくの字に曲げるようなお辞儀をする。

「こんにちはー」

のんびりとした口調でしゃべるそのお方。エメラルドグリーンの髪を後ろで縛ってまとめ、垂れ目がちの瞳に大きな黒ぶちの眼鏡。そして特筆すべきは――。

「なん……、だと……………?」

ミリアさんの胸より更に大きい、なんて。

幸いなことに私の眩きが他の人に聞きとがめられることはなかったようだ。

胸元が開いているブラウスから垣間見えるそれは、すごい肉感を有し、その触り心地はマシュマロのごとき柔らかさであろうことは傍目からも見てとれた。

そんな彼女は私の驚きとは別の驚きを持って、私の隣に座るおじいちゃんを凝視していた。

「あっ！あなたはあのときの……」

「過日は色々とお世話になりましたな。まさか孫の通う学校の方とは思いませんんだが」

一礼するおじいちゃんにのんびりと驚く、という驚くべきことをして目の前の女性はまた頭をさげると私達に席を勧めた。

「ええと、すいません取り乱しまして。わたしこの学校で校長をしております、シオーネ・クシュラーです」

ほう、と顔を赤くするその女性こそが私の入学する学園の最高責任者さんらしい。

でも、あのときのことでなんだろうか。

「あのすいません、実は私とヨシツグさんは数日前に一度お会いしております。そのときは本当にお世話になりました……」

私が疑問を口に出す前に、シオーネさんがどうやら説明をしてくれるらしかった。



《カリオリ魔術学校》では新学年がはじまる前に人の入替えが行われます。

今日は大きなドラゴンの看板を掲げている『ドラゴン&ダンジョン』という店で歓送迎会が行われました。学校を預かるものとして私、シオーネ・クシュラーも当然参加をしています。もっともまだ若輩者なので上座というものには今だに慣れないのですが。

お料理がすごく美味しいこのお店の名物は、20面ダイスを使った通称『運試しメニュー』。ダイスの数値が低いと大変『素敵な』お料理がでてくることで有名です。今日は平均値くらいだったので普通の炒め物が出てきましたケド。

そして宴もたけなわとなり、みんなぞろぞろと表にでます。

ぼー、としていた私に声をかけてくる男性がいました。

「では校長先生、私はこれで失礼しますが……。よろしいでしょうか」

「よろしいもなにもないですー教頭先生。今日もフォローありがとうございます」

ペコリと頭を下げる私に教頭先生はにこやかな笑みを返してきました。

「ちなみにシオーネ校長は今からどうされます？」

もうすぐ40に届きそうな教頭先生はめがねの奥にある細い目を更に細くして尋ねてきます。

この教頭先生は資産家でもあって、この学校に大きな資金援助をしてくれていますが、それを笠にきるわけでもなく、非常に勉強熱心な方です。

他の先生のなかには何人か連れ立って次のお店へという動きもあるみたいですが、今日は私も遠慮しておきたい気分でした。あまりお酒は強くありませんし。

「はい、少し酔ってしまいましたし今日は帰ろうかと思えますー」「そうですか。帰り道には十分にお気をつけて。では失礼します」

そんな教頭先生と別れて家に帰る途上、暗がりの道ですれ違った方とたまたま肩がぶつかりました。

「ツイテエ。なにすんだよ！！テメエッ！」

「すいませんー。大丈夫でしたか？」

なにやら当たった相手が悪かったようです。柄の悪そうな、というか非常に柄の悪いチンピラ達にそれから因縁をつけられること数分間。そもそも人数が圧倒的にあちらが多くその数10人以上いまして。さらにどこから聞きつけたのか最初ぶつかったときから人数も増えています。

私の気力は萎え果てる一方で、切り抜けようにもすっかり囲まれてしまっとうしようかと泣きたい気分です。

「なあ、よく見たらこの女結構いい体してんなあ……」

「お、確かななあ。特にこのおっぱいは滅多にお目にかかれそうもないや。へへへ、お詫びに俺達といいことしようぜ」

どうやらさらに悪いことを前の男達は考え付いたみたいです。そしてさらにそれに付随する口笛と嘲笑が私を追い込みます。

私はさらに路地の奥のほう、暗がりに連れ込まれ、道中、男の一人がすばやくなにかの魔法を使います。

私も魔法使いの端くれ。仕方なく自衛のため魔法を……。

「ま、魔法がつかえない……。あ、いまあなたが使った魔法が――」

そんなことを言っている間にまた別の男の手によって、びりびりっとブラウスの前を強引に引きちぎられ、胸が露になります。

そしてそのまま路地の一番奥、つまりは行き止まりの壁に追いやられてしまいました。前は飢えた男達、後ろは壁。

なぜこんなことになってしまったのか……。

「さて、では存分に可愛がってやるぜ」

「や、やめてください……」

「大丈夫さ、最期にはすっかり気持ちよくなってお前のほうからケツを振るようになるからなあ――」

男達の下卑た笑いが街の暗がりに消えていきます。彼ら数人の手には、手回しよく用意された猿ぐつわと何かのクスリ。どうせ碌なものではないでしょう。

そして街を覆う闇と同様、いやそれ以上に私の心に暗い『絶望感』が広がり、思わず目をつぶったとき。

ゴチン、と何か硬い物が当たったような音が辺りに響きました。

「イッテエッ！石が、俺の手に……。いったい誰がやりやがったあッ！！」

」

目を開ければクスリを持っていた男が手を押さえ、衝撃ででしょうか。クスリは遠くに転がっていつていました。

そして、いつの間にか。

私を守るようにチンピラたちとの間に立つ人影が増えていました。

「大丈夫ですかなお嬢さん……。む、これはいかな」

私の姿を気にかけてくれたのでしょうか、私を守るようにかけられるスーツ。そこには私を安心させる人のぬくもりがありました。

「ふむ、折角よい気分で飲んでおったのにう。さすがに職責上見てみぬフリもできんか」

「職責でなくても放っておかないでしょう、シマベナウ殿は」

「確かに相違ない。特にこういう輩は胸糞悪くてかまわんわ。もつともお主もその口じゃろ」

「……勿論」

そう、私のピンチに現われたのは、二人のおじいちゃんでした。

第12話 おじいちゃん、校長を助け、就職活動をする

突然の、それもご年配の登場に周りのチンピラたちからは失笑がおきます。

「おいおい、爺さん達。怪我をしたくないんなら、さっさとどこか行きな。」

「ふむ、おぬしはそう言うがの……。どうしたヨシツグ苦笑いなんぞ浮かべて」

「いや。このような手合いはどの世界でも似たような物言いをするものだと思うと可笑しくなりましてな」

「……『どの世界でも』ってどう意味なのでしょう？」

緊迫した場面にもかかわらず、つい質問をしてしまいます。

こんなだから『のんびりやさん』なんて先生達にいつも怒られちゃうのでしょうか、私は。

「いえ。最近別の世界からやってきた来訪者です。元の世界でも以前似たようなことがありますてな」

「はあ、そうなんですネえー」

他の世界からの来訪者。それはそんなに数は多くないですがしばしば《トゥモマーク》に流れ着く、ということでは有名な話です。もちろん実例を見るのは始めてですが。

なるほど、だからちよっと服装がかわっているんですね。

「そのあたりの話は後にせんかお主ら。先方がお待ちかねぞ」

「あうー、ほんとうにすいませんです……………」

そうでした。私、人生のなかでも5指に入るほどの危機を迎えていたのです。

彼らは確かに待ちかねていたらしく、怒気をあたりに撒き散らしながら私達にじりじりと近寄ってきています。

「まったくクソじじいどもめ……。退く気はないということだな。いくぞやっちまえッ!!」

リーダー格らしき角刈りの男の合図とともに、おじいちゃん二人に数人ずつ、手にはナイフやら剣などをもって襲い掛かります。その様子は暗がりでもあり、お二人の様子を確認することはできません。

しかし普通は数人がかりで、それも今私達がいる路地のようなあまり広くない場所で一斉に攻撃されればどうなるか――。

突きつけられた現実には私は再び心が折れそうになり――。

ドサドサドサッ。

「ふむ、近頃の若者はだらしないのう。これくらいで昏倒するとは。最近会ったまともな若者は、ヨシツグくらいしかおらん。誠、困ったものよ」

「はははっ。私もやはり御大にとっては若輩者ですか。それでも結構年をとったつもりなのですか」

「歳の差が倍も離れておれば、そやつらもおぬしも似たようなものじゃの」

傷一つなく二人のおじいちゃんが軽口を叩きながら平然と立っていました。

そして私はその二人のうちの一人がどなたなのか、ようやく気づきます。

しかし、チンピラどもは、どうやら頭に血がのぼっているようで
それどころではない様子で。

「オイコラ！！じじい相手に何てこずってる。こちらは魔法が使え
るのだぞ。魔法でやっちゃまえ！！」

「しかしさすがに殺しは……」

「なに言ってやがる、ここには最初から『女しかなかった』こと
にすればいいんじゃないか！」

リーダー格の言葉に呼応するかのように、彼らは杖を構えます。
そのとき、私を守るように立つ影がありました。そしてもう一人
の方、多分ヨシツグさんという方なのでしょう、彼は暴漢のほうに
向かっていました。

「シマベナウ町長、ありがとうございます……」

「ありや、気づかれてしまったか。暗がりじゃからわからんかと思
ったが……」

私を守るように立ってくださいている、《カリオリ》の町長、シ
マベナウさんにお礼をいいます。

でも町長、魔法の光に照らされて十分に明るいですよ？

「まあヨシツグがいまから彼奴等に灸を据えるので心配するな。ワ
シはもう疲れたからのう。ここで見学じゃ」

「でもここでは魔法が使えないー」

私がそういったとき、すこし離れたところで爆発が起きました。
そこは少し前までヨシツグさんが立っていた場所。

そこに更に、次々とチンピラたちの攻撃魔法がたたきつけられて
いきます。舞い散るのはたくさん砂埃。

「さて、お手並み拝見じゃの」
「……？」

町長さんの眩きの意味がわかったのは、砂埃が薄くなったところでした。

男達のうちの一人が唾を飲み込む音が妙に辺りに響きます。

「ほほほっ、またけつたいなものを出しよるワイ」

髭をつまむように撫でる老人の視線の先には、《ドラゴン》がいました。

そう、ヨシツグさんの周りには、先ほど私が飲んでいたお店の看板にあったかのような白色のドラゴンが彼を守るように取り巻いているのです。

しかし暴漢達は既に結界型の魔法封鎖魔法を使っています。
ある特定のアイテムをもっていないと魔法が使えなくなる、術者が限定されるかなり珍しい魔法なのです。

「ヨシツグさんの使っているのは……魔法？」

魔法が使えない空間でなぜ彼がアイテムもなしに果たして人が魔法が使えるのでしょうか。

しかし、マジックプログラム魔術礼式が励起したような形跡はないように思います。
もともと私自身魔法が使えないのでそのへんの探知はできなくなっているのですが。

「さて、君達。引く気はなのかね」

「はん、数人やったからって何を寝ぼけたことを。こっちは魔法を使えるんだ。それに人数だってなあ……」

確かに数人倒されたとはいえ、相手はまだ20人弱もいます。傍目から見れば、まだまだ大ピンチ。しかしなんだかもはやそんな気は全然しなくなっていました。

「では、こちらからはこれをお見舞いしよう。《龍牙突》」
ドラゴンスピーアーズ

ヨシツグさんを守っていたドラゴンが数十のそれに分裂すると一斉に暴漢達に襲いかかります。

なすすべもなく倒されていく男達。何人かはなんとか逃れようと試みますが、追尾性をもったそれからついには逃れることができなくなり――、あ、いまリーダー格の角刈りの人が倒されました。数分後、この場に立っているのは私と二人のおじいちゃんの3人だけ。

術者が倒れ、魔法封鎖も解けたので、私は拘束魔法を使って暴漢達を縛りつけます。

ちょうど私の隣に來た町長さんに先ほどのヨシツグさんの魔法のことを聞いてみます。

少し気になったことがあったものですから。

「なのであの方はあのときに《魔法》を使えるのですか？魔法が使えなかった状態にもかかわらず。ただ私はあれは《魔法》には見えなかったのですが」

「よく気づいてたの、あれは確かに《魔法》ではない。ただの魔力の塊をコントロールしているにすぎんよ」

「魔力の塊、ですか？」

「そうじゃ。魔法はそもそも魔術言語によって記述された魔術礼式と魔力によってはじめて発生するものじゃろ」

「はい、そうですよね」

町長さんの言うとおりです。そして先ほど魔法が使えなくなったのは、魔術礼式と魔力の結びつきをなくする種の結果が張られていたのです。

「しかし、そういうことをしない人間もいる」

「えっと、どういう……」

「一部の武芸の達人は、そういった手続きを経ず魔力をそのまま運用し自らの力とするのだ。『気』や『オーラ』などと言葉を変えてな」

魔力をそのまま運用する、ということとはほぼ不可能、というのが魔法使いの間ではセオリーなのですが……。

「つまり、あれはヨシツグの技、というわけじゃ。もつともあんなことができるのは多分奴しかおらんだろうがの」

かかか、と大笑しながら私から離れていく町長さん。私はその言葉に気が遠くなります。しかしそんな私を現世に引き戻してくれる声がありました。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

私をいたわるようなその声に顔が赤くなるのが自分でわかります。そう、ヨシツグさんの笑顔は本当に素敵でした――。

□

とまあそんなシオーネ先生のありがたい話を聞いているうちにあ

ぶなく始業式に遅刻しそうになった私達だったが、ぎりぎりなんとか間に合った。

「さて、式も終わったしか帰ろうかの」

とりあえず今日は式だけで授業自体、明日から本格的に始まるらしい。なのでクラスへの編入も正式には明日からということになる。

「どのクラスに入れるかまだ決めてなくて……。ううつ、すいません」

とはシオーネ校長先生の言。

「ねえお爺様。ノモルシー、ご飯食べたい」

「確かにそうじゃな、腹が減ってはなんとやら、何か腹にいれていくか」

おじいちゃんと手をつなぎながら歩いていたノモルシーの提案により、お昼ごはんをいただくことになる。とりあえずミリアさんの案内で手近な定食屋さんに入る、が。

「なに、この《ワイバーン定食》ってやつは」

「その名のとりの食べ物……。アヤカねえ様、一口食べる？」

そういつて私に突き出されるフォークに刺さったそれはただの鳥の唐揚げにしか見えない。

「いや、そんな悲しい顔しなくても大丈夫よ、私は自分の分がちゃんとあるのだから、ね。というかこちらの」

「ありがとう……」

私のあげたお肉をはむはむと食べるノモルシー。

ああ、癒されるわ。そうやってご飯を食べたのち、私とおじいちゃんは別行動と相成った。

なぜなら。

「ウチを希望した理由は何かね」

「魔法関係の製品をカリオリに提供し、生活の向上の役に立つという御社の理念に共感を覚えたから、ですな」

「なるほどー、そういつていただけるとありがたいですなあ、ヨシツグさん」

ここは、《カリオリ》中心部にある大きな建物。ここにはこの街最大の商社さんがある。

なんでも魔法関係の製品、たとえば私たちも使っているランプやシャワーなどの日用品を主に取り扱っていて、従業員も百人を超える。

そうなぜか私がおじいちゃんの就職活動の付き添いをしているからである。

「勤めの経験はありますか？」

「昔、何年か。それからは自分で事業を営んでおりましたなあ」

あんなおじいちゃんでも昔は会社勤めをしていたことがある。もつとも数年で独立して今のようになったらしいが。さすがにその頃事情なんて当時生まれてもない私が詳しいわけもない。

「なるほど……ではなにか得意なことってのはないのかい？」

「経営、マネージメントでしょうか」

「具体的にはどういう……」

「そのボードつかっても良いですか？」

そこからおじいちゃんと試験官さんとの難しそうな話しが始まった。

むずかしそう、といっても途中から話は協道にそれ、ロジスティック、物流の話になる。

「なるほど、輸送にコストがかかる、ですかの」

「そうですヨシツグさん。ご存知のとおり空荷なことが多くてなあ」

ちなみにミリアさんとノモルシーはおじいちゃんからお買い物をお願いされていて、それを買いにいつている。

しかし、面接に孫同伴なんて聞いたことないのですが、こちらの世界ではそれがデフォルトなのでしょうか。

それもなにやら面接と言いながらも雲行きがあやしくなってるし。

「なるほど。馬車で送った荷物の帰り荷を募集して運賃を稼ぐ、ですか……」

「口で言うは易し、というものではありませんがな。どれ、もしよければ今度実際にご相談いただければ、実現のお手伝いをしましょうぞ」

「むう、それはありがたいですな」

途中から面接、というよりもこの会社へのおじいちゃんからの助言、みたいなことが話の半分以上を占めて、面接終了の時間。

「ヨシツグさん。今日はありがとうございました。しかし残念ながらこちらでは現在採用を行っておりませんで採用は出来かねます。」

本来なら『結果は後日ご返答します』といって不採用通知を出すのがセオリーなのですが……。今日いただいた知見にさすがにそれでは不義理だと思えますので今申し上げます。申し訳ありませんでした」

「いやいや、こちらが無理にお願いしたのですから仕方ありますまい、貴殿が謝罪されることではありませんぞ」

「ありがとうございます！連絡先を」

この試験官さんもうやらおじいちゃんに乘せられてしまったクチらしい。

非常に感謝はされたものの、それでも結局は不採用という結果が変わろうはずもなく。

いい加減おじいちゃんに付き合うことに飽きてきた私は思い切つてたずねてみる。

「でもおじいちゃん、なんで『求人がない』ところばかりを狙ってアプローチしているの」

おじいちゃんはずと人を取らない、つまり人が足りているところを狙って活動をしている。

だから《トウモマーク》版求人情報誌なんてさっき一読しただけだ。

「それにしても結構会ってくれるものね」

「まあ時間があれば話は聞いてくれるものよ。それに紹介状も用意しておいたしな」

もちろん、人員が足りているので応募していないと断られたところもいくつかあった。

でも午後だけで今のところで三件目。

結構な打率であった。

そして、回るだけ回って、家路の途中でおじいちゃんはこのことをいった。

「うむ、しかしやはりワシに勤め人はしつくりせんな。やはりなにか自活できる道を探るべきかのう」

「つまり……？」

「てっとり早くいえば『起業』じゃの」

はあ。わたしはそうやって曖昧にうなづくことしかできないまま、ぱくり、とそこの屋台でかった肉まんをかぶりつくのだった。

うん、おいしい、確かにノモルシーがハマルのもわかるわ。

第13話 おじいちゃん、目当てにされる

「はじめまして、アヤカ・トコヨミと申します。こちらのことは不慣れなため、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします」

頭を下げる先には、好奇心という名の感情に揺らめく20対の瞳。今は《カリオリ魔術学校》の4年生クラス、3組のホームルームの時間である。

本日から開始される本格的な授業を前に、私は一人教壇の前で自己紹介をしていた。

「ではアヤカさんに何か質問などあれば……」

「しつもん、趣味はなんですかー？」

「そうですね………」

教師の発言が呼び水となって次々に質問が飛んできた。どこに住んでいるのか、彼氏はいるのか、定番の質問ラインナップにそれぞれ無難に答える私。

その時間もチャイムの音が鳴るまでのことで、ホームルームは終わり授業の時間がはじまる。

この世界でも鐘の音になるんだ、と妙なことに感心しながら、《トウモマーク》始めての授業に望む。

それは、思ったよりも全然普通の授業だった。

内容は「魔法」という科目こそあれ、「国語（もちろん《トウモマーク》の言葉）」や「社会」といった、「普通」の科目も多い。

授業自体はミリアさんとの予習の成果もあって、なんとか無難にのりきれたので一安心である。あとでお礼を言っておかないとね。そんなわけでお昼休み。

授業の合間の休み時間で生徒達の質問攻撃をなんとかさばききり、この昼休みは無事自作のお弁当をつつつけるほどの余裕はできていた。

「うーん、なんだか普通の学校だね。もっとクレイジーなところを想像していたのだけど……」

「そりゃそうよ。あなたこの学校をなににする学校だと思っていたの？」

「いや、いきなり攻撃魔法を的に向かって半日ぶつつづけで撃ち続けたり、奇声を発しながらなにやら見知らぬ言語を写経――、っていう授業を想像していたのだけど」

「なんなのよその想像はッ!？」

思わずもらした感想に突っ込みが入る。

私の机の傍らに、いつの間にか薄い水色の髪をたたえた女の子が立っていた。

それも同じような背格好の二人組。

「いや、知り合いの生徒さんがそんな感じだったからってつきり……。ええと確かあなたは……」

いくら一クラス20名程度でひととおり自己紹介をしてもらったとはいえ、さすがに全員を覚えられるわけもない。

ちなみに『知り合いの生徒』とは言うまでもなく、ミリアさんのことである。

「エイリス。エイリス・ベルストアよ。はじめましてアヤカさん。そしてこっちが姉のメリス、よろしく頼むわ」

「こんにちはー。メリスです。よろしくねアーちゃん」

アーちゃん？ いきなり決定している私のあだ名に少し驚いて、改めて二人を眺める。

双子なのだろう、顔立ちは二人ともよく似ている。

エイリス、と自己紹介した少女はいわゆるツインテールの髪型で、その長さは肩に届くかとどかない、といった位。

メリスはショートカットで後ろにはクリーム色の大きなリボンがついている。

まあ、きりりとした方がエイリスでほんわりしたのがメリス。そう考えれば間違いないのだろう。

「あなたのことは爺様からも聞いているわ。まあなんか色々大変な事情があるみたいだし、わからないこととかあったら気軽にきいて」

そこで私はあることに気づいた。

「あ、『ベルストア』って……」

「うん、そうだよアーちゃん。私たちシマベナウ・ベルストアの孫なの。うちのじーちゃんがどうもお世話になってますー」

「いえいえこちらこそ私の祖父がお世話に……」

互いに頭を下げる私とメリス。

「といっても私たちも親の仕事の都合で数ヶ月前に爺様のいるこの街にきたからそんなにココに詳しいわけじゃないのだけど」

「そんなことないわよ。色々わからないことが多いから教えてほしいわ」

エイリスはそう言うが、私にとってはこの街どころか、この世界に来てまだ少ししか経ってないのだ。

そのあと二人もお弁当だったらしくご一緒することとなった。

二人と話してみても印象。エイリスツンデレ、メリスのんびり。もっともこれは第一印象でしかないけど。

□

そして放課後。エイリスとメリアを家に招待することになった。というかむしろメリアが「アーちゃんの家では珍しいお菓子が食べれるんだよね？」と瞳を輝かせていたからまあ、仕方ないね、といった感じだ。

ほら、食い物の恨みはおそろしいし。それに同じ年の娘とも仲良くなっておきたい、というのも正直なところだ。

姉妹に聞くと、どうやら彼女たちの住まいも我が家から歩いて20分くらいのところにあるとのこと。

とりあえず我が家の1階のテーブルに陣取ってお茶とお菓子で3人でティーブレイクとしゃれ込む。

「そうそう、私達もアーちゃんも自宅から学校へは通いだけど、《カリオリ魔術学校》の生徒の半数以上は寮暮らしなんだよー」

もふもふとメリスが羊羹を食べながら教えてくれる。

和菓子だからどうかない、などと思っていたのだがどうやら杞憂だったらしい。

「へー、そうなんだ。じゃあ私達のほうが珍しいのね」

「そのとおり、メリスも言ったけど半数以上はこの街以外から単身でやってきているのよ」

そういえばミリアさんもこっちに居付くまでは寮生活だったと言っていたような。

彼女達の話を経合するに、どうやらこの《カリオリ魔術学校》は子女育成にかけては伝統と定評のあるお嬢様学校らしい。

色んなところのお嬢様が集まってきているそうだ。

大きい商家さんのところとか。どこぞの王族の娘さんとか。

「そうそう、だから礼儀作法にも結構うるさくて。できないわけじゃないけどいざやれて言われるとちよつと嫌よね」

「あー、エイリスさんが言いたいことよくわかるわー」

私も礼儀作法を幼少から厳しく叩きこまれてきたが、たまにしつくりこないときがある。それは『強制される』という意識があるからなのだろう。

本当の礼儀作法とは人を大切に思う心が根本にあり、相手を敬う心からでる自然な所作なはずだ、などとおじいちゃんの受け売りをつい語ってみたり。

「でしょ？ もちろん重要なのはわかってるんだけどねー。あと『さん』はいらないわよ。私もあなたのこと『アヤカ』って呼ぶし」
「了解。これからもよろしくね、エイリス」

いいながらエイリスはパクリと羊羹を口に放り込んでそっぽを向く。

お決まりのやりとりには恥ずかしくなったか。

そういったところでふと疑問に思ったことを口に出してみる。

「でも、なんでわざわざ多くの人間がこの街までやってくるのかしら」

この街でも学校はけっこう沢山ある。他の街も同様だろう。なぜならこの《カリオリ》は決して国の中心に位置するような街ではない。

日本でいえば中堅政令指定都市レベルといったところだろうか。それならばもっといい学校が他の街にあってもよさそうなものだけだ。

私の疑問にエイリスが答えてくれた。

「《魔法学校》でしっかりと魔法のことを勉強する、というのが一種のステータスになっているのよ。実際魔術士の社会的地位は高いしね。あと花嫁修業的な意味でも、ね」

「へー」

「でも一方で《魔法学校》と名のつくところの多くは軍に所属する魔術士を育成する、一種の士官学校がほとんど。あとは魔術ギルド直属のものが少しあるけど全て共学。その上ここ《カリオリ魔術学校》は長い伝統とかもあったりするものだから……。そんな事情で人気があるわけ」

「わたし達の学校はギルド直属ではないんだけど系統としてはそちらになるんだってー。アーちゃん、この『ヨウカン』ってやつ美味しかったありがとうー」

「いえいえ、どういたしまして。メリスもエイリスももうお友達だから全然OKよ。でもね、ちょっと気になることが一つあって……」

「ああ、確かに気になるな」

「エイちゃんもアーちゃんもどうしたの？」

「いや、メリス。どう考えてもあれは気になるだろう」

私達3人の視線がある場所に集まる。

そこには一人のこの場所では見慣れない緑髪の女性がぐったりと伸びきった様子でお茶を飲んでひさいでいた。

大きな胸が机と身体のあいだで圧迫され、服からはちきれんばかりの存在感を主張していた。その上、胸元開いてるし。

今まで気にしないようにしていたが、やはり声を掛けなければならぬだろう。

「あのー、なんでシオーネ校長先生がこんなところに？」

そう。なぜかシオーネさんがうちの1階でお茶を飲んでいたのだ。そもそも学校の仕事はどうした。仕事は。

「ちゃんと今日の分のお仕事は終わっています……あう、ごめんなさい」

「あ、いえちゃんと終わってるのならいいですけど。でもなんで我が家にいるんですか？」

それも勝手に。

「確かミリアさんには言ったような気がするけど……。あれ、もしかして私って不法侵入者、つ、つかまるの………？」

とたんに涙目になるシオーネさんにこれ以上強く言うこともできず。

「そうですか……」

と、お茶を濁した返答だけをしてミリアさんの方を見る。

彼女は何故か楽しげにお皿を洗っていて、私が視線を向けると手を振ってくれた。

なにか一気にこの場所のサロン化が進んだような気がする。いつの間にか飲食店によくあるカウンターとか設置されているし。もっともこの世界に《コーヒー》に似た概念のものはないらしい。

残念。

「実は。ちょっとヨシツグさんに会えないかなー、相談できないかなー、なんて思ってたんですが、お留守だったみたいで。はあ、私って不運だわ……」

おいおい、この人もうちのおじいちゃんが目当てか。

ちなみにベルストア姉妹は新たにお出したケーキの攻略に二人して夢中になっていた。

「あの、『相談』なんてどうしたのですか校長先生？」

「よく聞いてくれましたー。実はうちの学校、お金がなくて……。ぶっちゃけ経営難なんです」

「……………はあ？」

いまさっきまで評価が高かったはずの我が学び舎の、いきなりの経営危機発覚であった。

でもシオーネさん？

いくら一回ピンチから助けられた恩人だからって、すぐにまたこんな重大事を悩み相談、というのは正直どうかと思いますよ？

第14話 おじいちゃん、立つ

お風呂。それは日本人にとって馴染みの深いもの。

もちろん、古代ローマやトルコといった国々でもそれぞれの形で発達はしていたのだけど。

そして、風呂に入る、という行為そのものは心身を清めるだけでなく、日本の江戸時代においては社交の側面を多いにもっていたということは人口に膾炙している話だ。

ただ、それは《トゥモマーク》の人たちにとってもある程度同じだったようで。

「ふー、やっぱり風呂は《トゥモマーク》が生み出した文化の極みよねー、いきかえるー。しかしこんな大きなお風呂があるなんて、アヤカの家って何気にすごいわね」

なぜか私達クラスメイト3人組、私、エイリス、メリスは仲良くのんびりとお風呂につかっていた。

3人が足を伸ばしても全然大丈夫なそのお風呂は、先日ご厄介になったミリアさんの家のお風呂と同じくらい、つまりはスーパージョー銭湯の一般的な大浴場と同じくらいの広さを備えている。

まあ日本風に言えば裸の付き合いというやつなんだろうか。

「はははは……」

でも、そんなエイリスの賞賛に私はただ乾いた笑いをあげるだけ。

「どうしたの？ 会ったときから思ってたけどやっぱりアヤカって少し変わりものよね。まあ別に私はきにしないけど」

「わたしもー」

「ははははは……、はあ。なんでもないわ」

だってこの家、昨日までシャワーしかなかったんだもん。そうなのだ、ここは自宅の3階。昨夜までここはただの部屋だったはず。今は3階のスペースが半分に分けられ、半分がお風呂、半分がトレーニングルーム、みたいな形になっている。

「まあどう考えてもおじいちゃんの仕業よね……」

「あら、私がヨシツグさんにリクエストをしたのだけどー、アヤちゃん何か問題あったかしら？」

「いえミリアさんには何も問題ないです。私も助かるからいいんですけど……」

カポーン、と風呂桶の音が聞こえる。ミリアさんも私達と一緒に入っていて、今は洗い場でノモルシーの髪の毛を洗ってもらっている。

「シャワーも良い。でもノモルシーはお風呂がもっと好き」

「そうよねー、ノモルシーちゃんもあったかいお風呂がいいもんね」
「……………ふかふか、やわやわ」

ミリアさんに抱きつかれ、ノモルシーの頭がちょうどミリアさんの胸に挟まれる形になった我が妹はよくわかるようなわからないような声をあげた。

さてなにやら脱線した。話を戻そう。

シオーネさんの衝撃の告白『学校経営ピンチ』のあと、結局エリス達もウチでご飯を食べていくことに。そして今は食後のお風呂タイム、というわけだ。

ちなみにシオーネさんは学校に戻っていった。なにやら急用というやつらしい。

学校の先生って大変だね。

よって、シオーネさんは食事前に戻ってきたおじいちゃんには出会えずじまいであった。先生残念。

「それにしてもエイリス達も綺麗なからだしてるわよねー」

「……ちょ、ちょっと変な目でみないでよ！」

ベルストア姉妹の体を嘗め回すように視線を這わせ、ため息をつく私を見て、エイリスが腕で胸を押さえてちぢこまる。

二人の体はさすが一卵性双生児だけあってそっくりである。

ほっそりとした体つきながら、女性を感じさせる柔らかなライン。特にお尻から太ももにかけてのそれは芸術すら感じさせられる。

そして極めつけはつるつるのお肌。そう、全身つるつるであった。しかし、エイリスの発言は心外である。もう、とって食べるわけではないのに。

「いや、食べられそうな気が……」

大丈夫だよ、私、ソノ気ないから。だいじょうぶ、ダイジョウブ。

しかし、こっちの世界にきて知り合う女の子達はみな美少女さんであるので、一歩踏み外すと大変なことになりそうだ。

なんだろうか、こっちの世界では審美眼の基準が違うのかしら？

□

そして、お風呂のあとは、前日おじいちゃんが口にした『起業』について家族会議が開催される。

参加者は私、おじいちゃん、ノモルシーとミリアさん。

少しはなれた席では、エイリスとメリスが興味深そうにこっちを見ていた。というか結局お泊りなのです二人とも。

起業。

それは独立してなにかしらかの事業を起こすこと。

元の世界において、起業を考えたとき一番とっつきやすいのは食べ物屋さんだという。

それは『食』が生活を営む上での根幹に関わり、また現金商売なので日銭が入ってくるからだ。

しかし一番とっつきやすい、というのは一番数が多いということ。つまり競争が超激しい。

日本でも有名人が出した飲食店がつぶれたりするのは、その競争の厳しさ故だ。

「なのでメイド喫茶は却下です、おじいちゃん」

私は読んでいた説明資料を机に置くと、そう宣告した。

「ふむ、結構いけると思ったんじゃがの。ミリアさんには喜んで協力する旨、さきほど既に確約をいただいておったのじゃが……」

「……………」

いつ作ったのか、おじいちゃんが作成していた説明資料をあらためてぱらぱらとめくる。

無駄によい出来。なぜかA4フルカラー製だし。

「夜なべをして作ったからのう、この事業計画は。結構いい線いっていると思うのじゃが？」

「……これ、誰がデザインしたの？」

私の手はあるページで止まる。

扇情的なメイド服のデザインまでばっちりできている。おっぱいの上半分が露出する、素敵なやつだ。

「む、服のことかな？ さすがにデザインについては女性に一日の長があると思ってな、元の世界の参考資料をミリアさんに見てもらいながら、デザインしてもらったんじゃないよ」

ミリアさんのほうをチラリと見る。

そしてすぐさま視線をおじいちゃんに戻す。

「……駄目なものはダメー！！ 却下よ却下！」

正直採算がどうやら、というのはどうでもよくなった。

なぜならミリアさんが隅っこで「ご主人様……ああいけません」とかいいながら頬を上気させ、軀をくねらせているから。

実のところ、ミリアさんがメイドさんになるのは正直私も見てみたい。

しかしいけない、なんとしても止めないと。どんなプレイ……もとい間違いが起るのかわかったもんじゃない。

そして至極当然ながら、おじいちゃんがその危険性に気づくはずもなく。

「ぬう、床詠家にあるまじき論理性の無さじゃのう、アヤよ」

「論理じゃない、最終的に物事の成否を決めるのは感情よ！！」

なんて、ちょっとかつこよさげなことを言って煙に巻いてみたり。しかしそれが通用するはずもないから……。あ、そういえば。

「ふむ、しかし《メイド喫茶》というものは以前アヤとの話しのなかで教えてくれたような気がするが……」

「さて、ここで町長さん情報。この街で喫茶店を出すすには資格が必要だということですー」

そうなのだ。

喫茶店はこの《カリオリ》では「魔法薬」ジャンルのお店に該当するらしく、そのジャンルのお店を出すために様々な届け出が必要らしい。

ちなみに、この事実さつき聞いた。

あ、なんで聞けたかって？ おじいちゃんが帰ってきたとき、なぜか一緒にシマベナウさんがいて、夕飯を食べていったからである。そこでエイリスとメリスのお泊りも決まった。もちろんシマベナウさんは飲むだけ飲んで帰っていった。この人もお仕事大丈夫なのだろうか。

私の猛烈な反論にあきらめたのか、おじいちゃんはわざとらしく肩をすくめる。そして、

「仕方ないの。ではコンサルでもするか」

出た。おじいちゃんの十八番、前後の脈絡が全くつながらない結論。

でもこういった話でも後で説明されるとなんとなく納得してしまうことが多々あるので注意しなければならなのだけど。

机の上にはまた別の資料が提示される。

この手際のよさ。それを見て私は確信する。

ああ、こっちが『本命』だ。

机に置かれた資料を少し読んだミリアさんが質問する。

「ヨシツグさん、『こんさる』とはどういうお仕事なのですか？」

どうやらこの概念は《トウモマーク》にはなかったらしい。

ミリアさんの質問におじいちゃんが丁寧の説明する。

コンサルタント。それは簡単にいえば『何かしらか困っている問題を解決するために助言などを行う』お仕事のこと。

でもコンサル、と一口にいつても元の世界でいえば

・企業や経営者から依頼により、経営上の問題解決をする、『経営コンサルタント』

・新会計基準への対応支援などを行う『会計コンサルタント』

・新システムの導入を支援する『ITコンサルタント』

のように色々な種類があるのだけど……。

「一つ聞くけど、おじいちゃんがやろうとしているのはどのジャンル？」

「それは『魔法コンサルタント』じゃよ。魔法に関する様々な課題を解決するお手伝いをしよう、そういうわけじゃな」

「そして、そこから私達が元の世界に帰るためのヒントがないか探したりする、というわけね」

「ふむ、さすが我が孫、察しがいいの」

なるほどね。おじいちゃんの意図はわかった。

でも一つ、それも重大な懸念事項がある。

おじいちゃんはそういうし、確かに耳障りはかっこいいのだが、

《トウモマーク》にいる現状ではそれはつまり……。

「でも仕事がなければただの『無職』ってことじゃない？ おじい

ちゃん」

「うむ、確かに現時点ではそうじゃな。現時点では」

そう、名乗るのは自由なのだ。仕事さえあれば。

ちなみにおじいちゃんが無職でも当面の生活費に困ることはなさそうということはおわっている。

おじいちゃんのへそくりという名の宝石はまだ換金していないものがほとんどだけど、いくらか換金してこっちの通貨にかえれたし、結構な金額になった。

そして今はわずかだがミリアさんの下宿代ももらえるし、私は返さなくて良い奨学金をもらえることになっている。

奨学金を貰えることが確定したとき、小躍りしたのは内緒である。やっぱり先立つものは必要だしね。

もつとも散財できるほどの大金をもっているわけではないので注意する必要がある。

しかしおじいちゃんの言い方、ひっかかる。何かあてがあるのだろうか。

「……………あてはあるの？おじいちゃん」

「うむ、そうじゃのう……………」

そうやって、おじいちゃんは自らの顎をさする。

私は知っている。日本にいたときから「自分で事業を起こすのはもうやったから、今からは助ける立場になってみたいのう」などとおじいちゃんが冗談のように言っていたことを。

そして、おじいちゃんの冗談は、おうおうにして冗談ではない。

「ま、手はじめに《カリオリ魔術学校》に巣食う問題にでも、チャレンジしてみようかの」

やっぱりそうなるか。しかしまたむちゃくちゃな……。

いきなり言い出したおじいちゃんの無茶に、おじいちゃんの無茶を書き留めるノート、通称「ヤムチャノート」はもう満杯になってしまいそうだった。

や、実際にはそんなノートなどってはないよ、本当だよ？。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7410r/>

異世界トリップおじいちゃん

2011年4月24日18時16分発行